
クッキングキャット <ダーク七都外伝>

絵理依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クッキングキャット > ダーク七都外伝<

【Nコード】

N3358M

【作者名】

絵理依

【あらすじ】

失恋で落ち込んでいる女子大生・真緒が見つけた一匹の『ほぼ黒猫』。どう考えても、普通の猫じゃない。何せ、パソコンを操作したり、料理を作ったり、美少年に化けたりするのだから。さらに、その猫を見張るかのように現れた謎の人々。

彼らの正体は？ そして、猫が真緒の部屋に上がり込んだ目的とは？ ある秋の日、真緒にちよつと元気をくれて通り過ぎて行った、素敵な魔物さんたちのお話。

この小説は、他サイトでも公開しています。

第1章 不思議な猫

いちばん最初、闇色の影がそこに凝縮され、固まっているように見えたので、真緒はどきつとした。

まだ昼間だというのに、どこからか夜を少しだけ切り取って、そのかけらをふわりと置いたみたいだな。なんとなく不安を感じるような、微妙に場違いなような、暗黒の固まり。けれども、よく見ると、それは猫だった。艶々の、やわらかい毛をした黒猫。

マンションのポーチに誰かが置いた、中型バイクのシートの上に、その黒猫はうずくまっていた。

ネイキッドバイクのピカピカのボディにも、銀色のハンドルにも、その黒猫は、材質的にそぐわなかった。

あまりにも対極的なものの上に乗っかっていたので、そう思えたのかもしれない。

バイクは機械で、冷たくて硬いわけだし、猫はふわふわで、あったかくてやわらかいわけなのだから。

真緒が近づくと、黒猫は目を開けた。

透明な水晶の底に、金箔が沈んでいるような目。

金箔には薄いエメラルド・グリーンが溶けていて、真ん中には、針金のような暗黒の瞳がはめこまれている。そんな感じだった。

黒猫は逃げもせず、うずくまった体勢のまま、自分の真ん前にかみこんだ真緒をじっと見上げた。

体は、小さめ。まだ子猫なのかもしれない。

「きみ、きれいだね」

真緒は、一瞬迷ったが、そつと手を差し出し、黒猫の首筋あたりを撫でてみた。

黒猫は、黙って撫でられている。

いやがる素振りはなかったが、かといって、気持ちよくもなさそうだった。

けれども、撫でられることには慣れている。

>そう？　撫でるなら、しばらくじっとしておいてあげるよく、という態度だ。

首輪はしていないが、やはり、どこかの家の飼い猫なのだろう。ノラ猫にしては、毛並みが整いすぎている。

「毛はビロードのようだし、目は宝石みたい。なんてきれいなんだろ」

よくある表現だと思ったが、真緒は黒猫に言ってみた。賛辞をこめて。

黒猫は、少し目を細める。

とはいえ、やはり喜んでいるようでもなかったし、>なーに齒が浮くようなことをくなどと照れているようでもない。

相変わらず、無表情だった。

もちろん、猫とは、そういうものなのだが。

もし笑ったり、頷いたりしたら、化け猫ということになる。

「あつたかい」

猫の体温が、心地よかった。

撫でるのをやめて、手のひらを猫の体に押しつけていると、じんわりとあたたかさが伝わってくる。

真緒は少し勇気を出して、黒猫を抱き上げてみた。
黒猫は抵抗もせず、おとなしく真緒の腕の中におさまった。

「あ、きみ。全部黒ってわけじゃないんだ」

猫の両前足の先は、真っ白だった。前足に、白い足袋をはいてい
るように見える。

白い部分は、量的にソックスほどの長さはないから、やっぱり足
袋だろう。

尻尾の先も、白かった。そして尻尾は、信じられないくらいに長
い。

真緒は、こんなに尻尾の長い猫は、見たことがない。

「黒猫さんじゃなくて、ほぼ黒猫さんってとこかな」

真緒は、その>ほぼ黒猫くを一回だけ、ぎゅうつつと抱きしめ、
それからバイクのシートの上に戻した。

「ありがと。抱かせてくれて。そんじゃね」

真緒は、>ほぼ黒猫くの頭を撫で、それから猫の正面で、手を振
った。

真緒がポーチを通ってマンションの中に入ろうとすると、ほぼ黒
猫は、バイクのシートから、ほんと、軽く飛び降りた。

そして、尻尾をくねくねと宙に踊らせながら、優雅な足取りで、
真緒のあとをついてくる。

（わ。しまった。うかつにかまってしまったから、ついてきてる）

真緒は、後悔する。

前も、自転車置き場にいたノラ猫にかまったら、しつこく足にまとわりついてきて、撒くのに苦労した。おまけにそのあと部屋に帰ったら、ノミが2匹ほど、足からフローリングの床の上にびよんぴよん跳ねた。

「ついてきてもだめだよ。うちのマンションは、ペット禁止なんだからね」

真緒は、くるりと振り返り、ほぼ黒猫に諭すように言った。

ほぼ黒猫は、透明な目で真緒を見上げた。

>そんなの、わかってるよ。別に飼ってもらおうなんて思っていないさくと言っているような気がした。>ぼくにはちゃんと家があつて、世話をしてくれる人たちもいるんだから<

「じゃあ、なんでついてこようとしてるんだよ？」

>単なるヒマつぶし<と、ほぼ黒猫は、答えたような気がした。

もちろん、そんな声は聞こえなかったが、なんか、そんな雰囲気伝わってきた。

「そう。そんじゃ、うち来る？ 私もヒマだから」

真緒がまだ言い終わらないうちに、ほぼ黒猫は真緒を追い抜いてマンションのエントランスホールを横切り、跳ねるように階段を上がっていった。

「おーい。行きすぎだつて。うちは二階なんだからね」

真緒が二階の通路に出ると、ほぼ黒猫は、三階に上がりかけてい

た階段を、なーんだ、低いところに住んでるのかと言いたげに仕方なく下り、再び真緒を追いついて抜いて通路を歩いて行く。

視界の下の方で、黒くてやわらかくてふわふわのものが動いていくのは、不思議だった。

でも、それは確かにそこにいるし、ちゃんと生きて活動している。なにしろ、しなやかで美しい。

「ここですから」

真緒は、ドアの鍵を開けた。

「どうぞ」

ほぼ黒猫は、真緒が入るよりもはるかに早く、躊躇も遠慮もなしにドアの隙間を通り抜け、するりと中に入った。

「言つとくけど、部屋はきれいじゃないからね」

真緒は、ほぼ黒猫のうしろ姿に呟く。

そう。ここんどこ、掃除していない。

掃除する気にもなれない。

掃除だけじゃなく、家事は全部やる気にはなれない。

家事だけじゃなく、勉強も、外出も、全部。

すべてのことが煩わしい。

真緒のマンションは新築で、どこもぴかぴかだった。

自分がその部屋を最初に使うのだということが、気持ちよかった。それにデザインも垢抜けていて、窓の他にガラスブロックの明り

取りなんかも、おしゃれにはめ込まれてあつたりする。

間取りは、申し訳程度の玄関と、半畳くらいのキッチン。

キッチンの横にはユニットバスと洗濯機置き場。

そして、7・5畳ほどだというフローリングの部屋（ほんとに7・5畳あるのかどうかあやしいと、真緒は思う）。

フローリングの部屋は、ベッドを置くと、もう余裕がなくなった。それでも、小さな冷蔵庫と本棚を壁に沿って並べ、部屋の真ん中には小さめの低いテーブルと一人掛けのソファを置いている。

テーブルの上には、二十インチのパソコン。

パソコンは、パソコンとして使うだけではなく、それでテレビも見ると、DVDも見る。CDも聴く。

一人暮らしの狭い部屋の中では、そのパソコン一台で十分だった。

その狭い部屋は、真緒の几帳面な性格のおかげで、常にきれいに保たれていた。

ところが、この一週間、いろんな雑多なものが片付けられもせず、積もっていつている。

いつもの真緒だったら、考えられない状況だ。

ほぼ黒猫は、真緒が床に散らかした教科書やノート、辞書、服、携帯の充電器、などなどの間を縫うように移動した。

猫とはいえ、その汚い部屋の中を歩いてもらうのは、やはり、なんとなくうしろめたかった。

ほぼ黒猫は、やがて一人掛けのソファの上に、ふわりと乗っかる。

「あ、やっぱりそこに座るんだ」

ほぼ黒猫は、そこでのんびりとグルーミングを始める。

この部屋の中での特等席。

ほぼ黒猫は、一目見て判断し、そこを選んだのだろう。

そのすわり心地のいい紺色のソファは、彼からのプレゼントだった。

日曜日、突然、沿線の駅近くにある、有名な雑貨屋さんから届いたソファ。

「やっぱりこの部屋には、ソファが必要だよ」と彼は、真緒の部屋に来る度に言っていた。

彼が、深夜のバイトをしたお金でそのソファを買ってくれたのだと知って、真緒はとても感激した。

それ以後、彼が遊びに来たときには、そこが彼の定位置になった。真緒が料理を作っている間、彼はいつもそこに座って、インターネットをしたり、テレビを見ていた。眠っていることもあった。

真緒は、自分の部屋で彼が眠ってくれることが嬉しかった。

平和で、静かな時間。いとおしくなるほど、楽しい時間。これからも、ずっと続いて行きそうな。

きつと、ずっと続いていくのだろうと思っていた。
当たり前前に、それを信じていた。

でも――。

もう、そんなこともない。彼がここに来ることは、たぶん、永遠にない。

そう思うと、また涙がじわりと湧き上がる。もう、枯れるほど泣いたのに。

今は、どういうわけだが、そのソファには、猫が座っている。さつき会ったばかりの、見知らぬ猫。

既に、この部屋の主にでもなったかのように、丁寧な毛並みの手

入れをしている。

真緒は、パソコンをつけた。何か、音がほしかった。

「ほぼ黒猫さん、おなかすいてる？　なんか食べる？」

真緒は、取りあえず冷蔵庫を開けてみた。

たぶん、猫が食べられるようなものは、ないかもしれないと思っただけだ。

冷蔵庫に入っているもの。

干からびかけたナスが一個、ピーマンが二個、キャベツがわずか。それから玉子が二個、ハムが一パック、うどんが一玉、なくなりかけたキムチ一瓶、リンゴが四分の一個。

プレーンヨーグルトが少し。チョコレイトーかけ。あとは、調味料。

冷凍庫には、夏からずっとそのままの冷凍枝豆と、一週間くらい前に冷凍したご飯。

もちろん、いつもは、もっと食料であふれている。

ただ、買い物に行って、冷蔵庫を補充する気になれない。

「きみが食べられそうなものって、ハムくらいかな。それが、マーガリン、舐めてみる？　ツナ缶もあいにくいしね。カニカマとか、かつお節もないんだ。悪いね」

ほぼ黒猫は、相変わらず、自分のグルーミングに夢中になっている。

携帯が、鳴った。

『猫ふんじやった』の、オルゴールのメロディー！

桃華からのメールだ。

前に桃華が遊びに来て、しばらくして帰ったあと、突然携帯からこの『猫ふんじゃった』が流れ始めた。

びつくりした。そんな着メロ、聞いたことも、もちろん設定した覚えもなかった。

桃華が勝手に真緒の携帯にダウンロードして、自分からのメールはそのメロディーが鳴るように設定して行ったのだ。

以来、時々真緒の携帯は、オルゴールの『猫ふんじゃった』を奏でている。

真緒は携帯を取り出し、メールを見た。

>生きてる？<

件名なし、本文のみの、とても短い文章だけれど、それで桃華の気持ちは、十分伝わってくる。

>生きてる<

真緒はそう打って、返信した。

ありがとう。心配してくれて。そういう気持ちを文字の間にこめて。

そして、携帯を閉じて、テーブルに無造作に置く。

真緒が大学を休んでから、きのうで一週間。

桃華にも、もう一週間以上会っていない。

大学へは、きょう、久々に行った。

どうしても出なければならぬドイツ語の授業だったってこともある。

毎回出席しないと絶対に単位が取れないという、そして、選択した学生の半分近くが単位を落とすという、恐怖の科目だ。

一回休むと、わからない部分が多くなり、二回休むと、完全に授業についていけなくなる。それは避けたかった。

あと、ドイツ語の授業は、みんなに会わなくてもよかったから。

真緒と仲のいい友人たちは、みんなドイツ語を避け、他の、単位を取りやすい第二外国語を選択している。

桃華はイタリア語だったので、もちろんドイツ語の授業で会うことはない。

みんなには会いたいけど。あの明るい笑顔の輪の中に、真緒はまだ戻れそうもない。

明日は、心理学。そのあと、シナリオ論と日本文学史の講義もある。

久々に出ようかな。桃華も来るかもしれない。

そろそろ、浮上しなくっちゃ。

でも、やっぱり、当分浮上できないのは、自分でもわかる。

桃華に会ったのは、一週間以上前の、お昼が最後。

学食にいた真緒を見つけた彼女は、真っ直ぐ、真緒のテーブルに歩いてきた。

服装で、遠目からでも、桃華だということが、すぐにわかる。

アンティークドールっぽい衣装をもう少しシンプルにした感じの服装。

大学に来るときは控えめにしていて「ん？もしかして？」という感じだが、桃華と休みの日に出かけると、「う。やっぱり」ということになる。

一緒に歩くのには、ちょっと勇気がある服装。いわゆる、ゴスロリ。

その日もまだ普通っぽく、ワンピースとカーディガンという格好でまとめてはいるが、桃華が被っているのは別珍のウサミミ帽子だった。

2本の長い耳が、桃華のストレートの髪と一緒に、さりげなく後ろに垂れている。

大学にきて来る服装のゴスロリ度も、春に比べると、ゆるやかに上がってきているような気がする。

髪を赤系の栗色に染め、メイクもばっちりしている桃華は、真緒より一つ年上。一浪してから、大学に入ったからだ。

一つだけ年上のはずなのに、桃華は五歳も十歳も年上に感じることがある。

それは、彼女が、一瞬にして人を見抜くという、特殊な才能を持っているせいなのかもしれない。

桃華の、第一印象で他人に対して働くカンは、はずれたためしがないらしい。

ただし、本人によると、自分の恋愛に関しては、まるつきりその才能は機能しないらしかった。

桃華は、真緒の真正面の席に座った。

それから、真緒をじっと見つめて、しばらく黙っていた。

「どしたの？」

真緒がたずねると、桃華は眉間に皺を寄せ、目を宙に漂わせた。彼女がそんな複雑な表情をするのを真緒は初めて見た。

桃華は、意を決したように、口を開く。

「あのさあ」

「ん？」

「きのう、遊園地に行ってきたんだ」

「ああ。従妹が遊びに来るから、一緒に行くって言ってたよね」

けれど桃華の顔は、遊園地の楽しい話をしそうな雰囲気ではなかった。

彼女は、複雑な表情のまま、続ける。

「……で、見たんだ」

「何を？」

「あんたの彼氏。その遊園地で。女の子と一緒にだったよ」

「え？」

桃華は、真緒の視線を真っ直ぐに受け止める。

「それは、その……」

真緒は、言葉を探した。

言い訳になりそうな言葉。

桃華を、そして自分も納得させることが出来るような、とても便利な言葉。

だが、なかなか見つからない。

「単なる女友達とか、後輩とか、親戚とか……じゃないかな」

「そんな雰囲気じゃなかったよ」

桃華は、真緒が見つけた、当たり障りのない言い訳をばつさりと否定した。

「詳しく聞きたい？」

桃華が言った。

意地悪なんかで言ってるんじゃない、ちゃんと現実をわかれって、その目は告げていた。

「いい。聞きたくない。もう十分」

真緒は、呟く。

最後のほうは、もう、自分でも聞こえなかった。

「真緒、二股かけられてるんじゃないの」

桃華が、ちよつと腹立たしげに言った。

桃華は、彼に対して、以前からあまりいい印象は持っていない。初めて彼を紹介したときも、一瞬にして、>油断のならない人物<という評価を下したと、自分で言っていたのだ。

「じゃあ。そういうことだから」

桃華は、そつと真緒の肩に手を乗せた。それから席を立て、行ってしまった。

真緒は、ひとり、残された。

いろんなものが頭の中をぐるぐると回った。

「二股じゃないんだ、たぶん」

真緒は、ハムのパックを開けながら、つぶやいた。

「もう終わってて、それで新しい彼女が出来た。それが、新しい彼女が出来そうだったから、終わりにしたのかも」

もう十日以上になる。彼からの連絡が来なくなつて。

何回もメールを出したのに。返事は全く来ない。

電話もかけてみた。

いつも、留守番センターにつながつた。

故意に、真緒からのメールを無視して、電話にも出ないと思えない。

付き合い始めた頃は、しつこいくらいにメールも電話もくれていたのに。

真緒は、ハムを一枚つまんだ。

きれいなピンク色の断面。艶々していて、なめらかで、おいしそうな。

けれども、食べる気にはなれない。

真緒は、ほぼ黒猫の鼻の上に、ハムをかざしてみた。

ほぼ黒猫はグルーミングをやめ、ハムの匂いをふんふんと嗅ぐ。だが、すぐに、グルーミングに戻ってしまう。全く興味がなさそうだった。

「ハム、食べないの。じゃあ、これは？」

真緒は、指にマーガリンをつけてほぼ黒猫の鼻先に近づけてみた。

だが、やはり匂いをかいただけで、反応はあまり芳しくない。

「じゃあ、何が食べたいの？ 言ってみてよ。なんなら、近所にペットショップがあるから、買ってきてあげるよ」

真緒はほぼ黒猫に質問したが、もちろん、返事を期待したわけではなかった。

何気にはほぼ黒猫がグルーミングをぴたりとやめて、『そおお？ じゃあ、このメーカーの、このカリカリを買ってきてよ』なんて答えたら、気を失うだろう。

でも……。

今の私の状態だったら、気を失わないかもしれない。

真緒は、ぼんやりと思う。

案外、不思議なこととか奇妙なことが起こっても、全部受け入れちゃうかも。

落ち込みすぎて、普段の感覚が麻痺している。
自分じゃない自分が、ここにいる。

「わたし、落ち込んでるの。失恋で」

真緒は、ほぼ黒猫に向かって、呟いた。

「失恋で落ち込んでるなんて、馬鹿みたいだと思う？」

もちろん、ほぼ黒猫は、答えない。

グルーミングを続けている。

「ネットで、動画でも見る？ ネズミさんとか、鳥さんとか。好き

でしょ、そういうの」

真緒は、適当に検索して、鳥の動画を選んだ。
カラスが数羽、アンテナに止まっている動画だ。

翼を羽ばたかせたり、体を揺らして鳴いたりしている。他の鳥よりは動きが大きくて、迫力があつた。

ほぼ黒猫は、じっとパソコンの画面をみつめた。やはり、それは興味をそそられたようだ。

「じゃ、しばらく見ててね。画面に爪たてたら、だめだからね」

真緒は、冷蔵庫を再び開け、ハムを直した。

何か、食べなくちゃ。

でも、やっぱり、食べる気にはなれない。

おなかはずいいてるのに。

料理を作る気になれない。

自分に栄養を与えたくない。

彼に捨てられた自分に、食べ物なんか与えたくない。

また涙がこぼれて、床に落ちた。

涙を出そうなんて、思っていないのに。

勝手に出た。

今、冷蔵庫にある材料で出来るものって……。

焼きうどんくらいかな。キャベツとピーマンと、それからハムで。ほんとは、豚肉を入れたらおいしいのだけど。

あとは、ハムエッグにナスの味噌汁をつけるとか。

けれども、キャベツもピーマンも、切るのがめんどろだった。

フライパンに玉子を割って、ふたをして、水を入れるのもめんど
う。

ナスを細かく切るのもめんどう。

もつ、なんか複雑なことをするのが、すべてめんどう。

冷蔵庫の上には、レトルトカレーが一箱、乗っかっている。

実家から食料品が送られてきたとき、一緒に入っていたものだ。

真緒は、レトルトカレーが苦手だった。食べると、必ず胃がもた
れる。

普通の手作りカレーは好きなのだが。

気分的なものなのかもしれない。

だから、もちろん、レトルトカレーもパス。

だいたい、鍋にお湯を沸かすのさえ、苦痛だ。

その前に、カレーなら、ご飯を炊かなければならない。

お米を計って、研いで、分量の水を入れて……。そんな複雑なこ
と、絶対、無理だ。

真緒は、ため息をつく。

こついつの、鬱状態っていうのかもしれない。

何もやる気になれない。

真緒は冷蔵庫を閉めた。

そして、くると向きを変えたところで、固まる。

パソコンの画面には、真緒が用意した、さっきのガラスの動画と
は別のものが映っていた。

「な、なに、これ……」

それは、ネット通販のサイトだった。

アップで、どーんと大きく映し出されているのは、缶詰の写真。ウェットのキャットフードの缶詰——つまり、『猫缶』だ。

猫缶の側面には、しましまの猫が舌なめずりをしている写真が入っている。

真緒は、しばらく、その猫缶の映像を見つめた。

なんで、これが？

まさか……。

真緒は、ほぼ黒猫の前足をさっとつまむ。

グルーミングを邪魔されたほぼ黒猫は、真緒をじろつと眺めた。

「まさか、この手で、マウスを動かした……とか？」

ほぼ黒猫は、真緒の指の間から、自分の前足をひゅんと引っこ抜いた。

そして、何事もなかったように、グルーミングに戻る。

「単なる偶然？ カラスの動画のあと、このページが現れるようになってた？ でも、そんなわけないものね。何か動作をしない限り、きみがたまたまマウスかキーボードの上に乗ったたら、たまたまこのサイトのこの猫缶のページが現れた、とかだよな」

ほぼ黒猫は、完全に真緒を無視している。ただ、耳は真緒のほうに向いていた。

「なんかよくわかんないけど……。ペットショップに行って、買ってきてあげるって言っちゃったし。どっちにしろ、うちにはきみが食べられるものって何もないもの。どうせ買いにいくなら、この猫缶にするね」

真緒が言うと、ほぼ黒猫は、どことなく満足げな顔をした……よ
うな気がした。

真緒は、その猫缶のページを印刷した。
そして、プリンターから吐き出された紙を折りたたむ。

「じゃあ、ペットショップに行ってくる」

真緒は、小さめのバッグに財布と携帯と猫缶を印刷した紙をほう
りこみ、肩にかけた。

それから、パソコンの電源を切る。

玄関で振り返ると、ほぼ黒猫は、相も変わらず、グルーミングに
いそしんでいた。

第2章 奇妙な人々

不思議だった。

何もする気になれなかったはずなのに。

ドイツ語の授業に出るのだって、本当は、ものすごい決断力がい
った。

だらだら考えて、迷いに迷って、やっとのこと大学に出かけたとい
うのに。

なのに、あの猫のためなら、ずっと部屋を出られた。

猫のためなら、やる気が出る。

たぶん、それは、自分のためじゃないからなのだろう。

自分のために何かしようなんて、面倒以外の何物でもない。

じゃあ、やっぱり、ひとりで部屋に閉じこもっていたら、よくない
ってことなのかも……。

自分しかいないし、自分のことしか考えない。

しかもそのベクトルは、ネガティブなほうへと向かってしまう。

もう何も考えず、取りあえず、明日の授業は、全部出てみようか。
みんなに会ったら、案外、落ち込みが直ってしまうのかもしれない。
い。

マンションのポーチの、さっきほぼ黒猫が乗っていたバイク
の横に、誰かが立っていた。

学生風の、背の高い若い男の子。真緒と同年代くらいだった。

背後のブロック塀に心持ちもたれかかり、軽く腕組みをしている。

たぶん天然パーマの髪は、カラスもびつくりの、真っ黒つやつや。真緒と同年代の男の子たちは、たいがい髪を染めているので、黒い髪の男の子は、かえって新鮮だった。

眼鏡をかけているので、どこか知的な雰囲気もあった。

服装は、ファッションにはまるっきりこだわりません、ということとをアピールしているかのような、ちよつとくたびれた感じの、厚手のパーカとブルージーンズというスタイル。

あまり、男子大学生特有の、どこか余裕のある、のんびりした感じはしなかった。

私服の高校生かもしれない。でも、高校生が外でこんな風に立っているには、まだ少し早い時間帯ではあるけれど。

このマンションの住人だろうか。それが、住人の友達。待ち合わせをしているとか。

真緒のマンションの、居住者の多くは学生だった。

だが、顔を合わせても挨拶はしない。

お互い透明人間でもあるかのように、すれ違うだけだ。

だから真緒も、その男の子を無視して、通り過ぎた。

彼の前を通り過ぎるとき、彼の視線を必要以上に感じたような気がした。

……まさかね。全然知らない人だし。

私がいかに暗い顔してるから、ただなんとなく見ただけ。たぶん、きつと、それだけだ。

だが、彼は、真緒をじつと見つめていたのだった。

真緒は振り返らなかったから、わからなかっただけで。

彼は、腕組みをしたまま、眼鏡の奥の薄い色の目で真緒を眺め、眉をひそめた。

そのペットショップに入るのは、初めてだった。

いつも前を通るのだが、ペットは飼っていないので、入る理由もない。

テラスがあつて、ドアもおしゃれで、ペットショップというより、カフェとか雑貨屋さんをしたほうが似合いそうな店だった。

ペットショップとはいえ、その構成はほとんどがペット用品で、生身の売り物のペットは、ハムスターやウサギ、ハリネズミなどの小動物だけのようなのだ。

店の中に入ると、いきなり、大きな茶色の犬が、玄関マットのよちに、通路に寝ていた。

真緒は仕方なく、犬のお腹と足の間のわずかな隙間をつま先で移動し、奥へと進む。

この犬は、かなり前から我が物顔でこの店にいたので、売り物ではなく、おそらくここで飼われている犬なのだろう。

「いらっしゃいませ」

アルバイトらしい女の子が、にっこりと真緒に微笑んだ。

「あのう。えーと。これ、ありますか？」

真緒は、プリンターで印刷した紙を広げて、彼女に見せた。

「ああ、『紀州のとれとれマグロ・ムース仕立て』ですね。ありま

すよ。こちらです」

ぎっしりと並べられた、色とりどりの猫缶。

とんでもない量と種類だった。

いったい猫を飼っている人たちは、猫缶を買うとき、どうやってこの中から、自分の猫の好みのものを選ぶのだろうか？

店員の女の子が指し示した場所に、写真と同じ猫缶があった。

猫缶の相場を知らなかった真緒は、その猫缶が他のに比べると、とんでもなく高いことに気がつく。他の猫缶の2倍以上の値段だ。

「こ、この猫缶、結構高いんですね」

「紀州の天然マグロですからねー。国産の限定品ですよ。ビタミンとオリゴ糖、キトサンも入ってますし、タウリンも強化されてます」

店員の女の子が微笑んだ。

彼女の説明は、猫を飼っていない真緒にはよくわからなかったが、それでも、その猫缶の写真が印刷された紙まで持って買いにきた手前、真緒はその『紀州のとれとれマグロ・ムース仕立て』とかいう猫缶を3個もまとめて買ってしまった。

高いとはいえ、三個で、おしゃれなカフェでカプチーノを一杯飲むくらいの値段だし。

あのきれいな猫になら、それくらい、おごってあげてもいいだろう。

真緒は再び、ナマ犬の玄関マットの間をつま先で抜けて、店の外に出た。

『ありがとうございました〜!』という店員の女の子の声が、明るくて、嫌味がなくて、やさしくて、なんかあったかくて、ほっとした。

たぶん、単なるお客に対する挨拶なのかもしれないけれど、今の真緒には、どんなちっぽけなやさしさだって、きつと心にずきんと響く。

「遊園地かー。私は、連れて行ってもらったことなかったな」

真緒は、呟いた。

呟いたあと、また涙がこぼれそうになる。

いけないな。恨み言になっちゃう。

本当は、遊園地に行きたかった。

遊園地だけじゃなくて、美術館とか、図書館とか。

一緒に外食をしたり、甘いものを食べたり、あと、桜を見に行ったり、花火を見に行ったり。

彼といろんなところへ行つて、いろんなものを見て……。

普通のデートがしたかった。

でも、彼と会うのは、いつも真緒の部屋。

真緒はいつも、彼のために料理を作った。

料理の本を見ながら、手の込んだ、彼がびっくりするような珍しい料理を作った。

毎回彼は、とても喜んで、おいしいおいしって、食べてくれたのに。

楽しかったのは、私だけなのかな。

「メシタキオンナだよ」

桃華は、以前、真緒に忠告するように言った。

「都合よく、利用されてるだけじゃないの？」

でも、真緒は、信じなかった。

そんなはずないよ。ちゃんと付き合ってるんだもん。

いつも、こちらがはずかしくなるくらい、好きだって言ってくれる。

メールの回数だって中身だって、他のカップルには負けない。

でも……。

そうだったのかもしれない。

今となっては。

真緒は、コンビニの前で立ち止まった。

ドイツ語の授業から帰ってきたときも立ち止まったが、通り過ぎた。

でも、今回は、入ってみる。

取りあえず、何か食べなきゃ。

自分で作るのがめんどうなら、出来合えのものでも。

真っ直ぐ、惣菜の棚を目指して、歩く。

だが、棚に並んでいる料理をざっと見て、真緒は後悔する。

やっぱり、食べる気にはなれない。

スパゲッティに、焼きそばに、炒飯に、あとは、こってりしたお弁当。全部、茶色の濃淡に見える。

かといって、見た目が色鮮やかっぽいサラダも、サンドイッチもカップめんも、食べられそうになかった。

もつと、何か、こう、出来立ての新しいものがあれば、食べられるかもしれない。温め直して食べる、冷たい料理じゃなくて。

あったかくて、パワーがあつて、見た目もおいしそうな色をしていて、元気が出るような、そんな料理……。

それって、わがままなのかもしれないけれど。

迷った末、真緒は、食パンを買った。

食パンなら、きょう食べられなくても、冷凍も出来るし、無駄にはならない。それに食パンは、冷やされて売られていなかったからだ。

中年の女性店員さんの、潑刺とした『ありがとうございました！』の挨拶が、やはりなんとなく、嬉しかった。

マンションに戻ってくると、ポーチの同じところに、相変わらずあの男の子が立っていた。

友達は、まだ現れないのだろうか。

男の子の前を通り過ぎるとき、真緒は、はつきりと視線を感じた。彼は真緒を上から下まで一通り見て、食パンの入ったコンビニのレジ袋を見て、それから、猫缶が3個入った、ペットショップのレジ袋を何の遠慮もなしに、露骨に眺めた。

レジ袋は半透明なので、何が入っているかは、ばれられた。

猫缶の『ムース仕立て』という小さめの文字さえ読めるくらいに、透けている。

わ。なんか、いやな感じ。

真緒は、急いで通り過ぎようとしたが、彼が突然話しかけてきた。

「きみ、猫を……」

「飼ってません！ 猫なんて、飼ってませんからっ！」

真緒は、さらに何か言いかけた彼を振り切り、階段を駆け上がった。

そしてあせりまくりながら鍵を開け、部屋の中に飛び込む。

ドアノブから手を離さないうちに、真緒はしっかりと鍵をかけ、チエーンを下ろした。

は、話しかけてきたよおお。

猫缶持つてるから、猫飼ってると思われたのだろうか？

もしかして、大家さんの知り合いとか、親戚？

ペット禁止なのに猫飼ってるって、告げ口するつもりとか？

「ん？ なんかいいい匂いがする？」

真緒は、部屋の中を眺めた。

ほぼ黒猫は、相変わらず、ソファの上にいる。

もうグルーミングはとうに終わったようで、今は丸くなって、ゆったりと座っている。

パソコンのモニター画面には、テレビの番組が映っていた。

「え？ ケーブルテレビ？」

真緒があまり見ないチャンネル、決して見ない番組だった。

芸人とおぼしき人物が、どこか街中でインタビューをしている、なんかそんな感じの番組。

たぶん、まだそんなに売れていない芸人だ。真緒は、お笑い番組

はよく見るほうだが、全然見覚えがなかった。

「きみがチャンネル合わせたの？」

ほぼ黒猫は、知らん顔をして、丸くなっている。

確か、部屋を出るとき、パソコンは切ったはずなのに……。

そして真緒は、テーブルに何げなく視線を落として、愕然とした。そこに、料理が置かれていた。

真緒がいつもパスタやカレーを入れる、オールマイティーの大きな皿とお椀と、お椀。

お皿には、焼きうどんが入っていた。お椀には、みそ汁。いい匂いの正体は、この料理だ。

「な、なに、これ……」

うどんには、ハムと玉子が絡まっていた。ハムと玉子は、ほどよく焼き目がついている。トッピングは、青のり。

ハムのピンクと、玉子の黄色と、青のりの緑。色取りもきれいで、おいしそうだった。

みそ汁の具は何なのかはよくわからないが、何か赤っぽい色のものが沈んでいる。両方とも、出来立てだ。

真緒は、キッチンを振り返った。気にも留めずに通り過ぎてしまったキッチン。

そこも、様子が違っていた。

流しには、フライパンが突っ込まれている。小さな鍋も。

それから、木ベラとおたまじゃくし。

『早く洗ってね』と主張している、十分に使われた調理用具たち。

つまり――。

誰かがこの部屋の中に入って、料理を作ったのだ。

「どづいうこと……？」

鍵は、確かにかけて出た。

窓も、閉まっている。

防犯用に、窓にはさらに鍵を追加しているくらいだ。

誰も入れないはず。

新築だから、前の住人が同じ鍵を持ってる、なんていうこともない。

なのに、何で？

真緒は、ふと、ソファで丸くなっているほぼ黒猫の背中に目をやった。

背中の黒い毛の中に、黄色い小さなものが混じっている。

真緒は、それをつまみあげた。

玉子の切れ端だった。

焼きうどんに入っている玉子だ。

「きみ？　つまり、きみってこと？　これを作ったのって……」

ほぼ黒猫は、細く目を開けた。めんどろくさそうに。

> ああ、そうだよ。だから、さめないうちに、とっとと食べたら？<と、言われたような気がした。

「うん。確かに、早く食べないとさめるね。それに、おいしそうだし……」

真緒は、テーブルの横に、腰を下ろした。

どうかしている。

いつもの自分なら、きつと半狂乱になってる。

パニックを起こして、部屋を出て行くとか。

桃華に電話して、来てもらうとか、彼女の部屋に逃げ込むとか。

警察も呼ぶかもしれない。

とにかく、こんな感じで、テーブルについたりはしないだろう。

やっぱり、落ち込み過ぎて、危機管理意識とかが麻痺しているのかもしれない。

真緒は、焼きうどんを一口、食べてみた。

玉子とハムと青のりの、シンプルな焼きうどん。

味付けは、ウスターソース。

ハムが香ばしくて、おいしい。

焼きうどんって、キャベツや豚肉を入れなくても、こんなのも作れるんだ。

それから、味噌汁を飲んでみて、真緒は驚く。

味噌汁の中には、キムチが入っていた。

ピリ辛の味噌汁。キムチと味噌が、意外と合ったりする。

キムチって、味噌汁に入れてもよかったんだ。

目からウロコだ。そんな発想さえ、なかった。

つまりこの料理は、冷蔵庫に入っていたもので作ってある。

真緒はそのことに気づき、冷蔵庫を開けてみた。

やはり、中のものが減っている。

ハムもないし、玉子も一個なかった。うどんもない。

確実にここから出して、料理したのだ。

「で、ほんとに、きみが作ったの？」

そんなわけない思いながらも、真緒はほぼ黒猫にたずねた。
ほぼ黒猫は、真緒の質問には答えず、パソコンに映るテレビを眺めていた。

テレビの中では、名前の知らないお笑い芸人たちが走り回っている。

でも、もしこの猫がこの料理を作ったのだとしたら？
いったいどうやって作ったのだろう。

この猫の大きさでは、到底キッチンには立てない。
コンロにフライパンをかけることも不可能だ。
ガスレンジの上に乗っかるにしても熱いだろうし、そうしたら、
空中に浮かんでフライパンを動かすしかない。

しかも、あの肉球のついた小さな前足で、どうやって玉子を割って、ハムを切る？

真緒がペットショップとコンビニに行って帰ってくる、そのわずかな時間で？

絶対、不可能だ。

焼きうどんと味噌汁は、あつという間に真緒の胃の中に納まってしまった。

やっぱり、お腹はひどくすいていた。

やっと食べられるものに出会えて、なんか体がほつとしていた。
たとえば猫が作った料理でも。（本当に猫が作ったのか？）

「ごちそうさまでした。とーってもおいしかったよ」

真緒が言つと、ほぼ黒猫は、>当然さくとも言うように、うなずいたような……気がした。

「そうだ、猫缶買ってきたんだ。私が先に食事してしまつて、ごめんね」

真緒は、猫が食べやすいように、平たい器を選び、猫缶の中身を開けた。

ほぼ黒猫は、テレビを見るのをやめて床に降り、ムースマグロにかじりついた。

真緒は、キッチンで食器を洗い始める。フライパンと鍋も。スポンジで、お皿をこしこしこすりながら、ぼんやりと考える。

もし、猫が作ったんじゃないとするなら、では、誰が作ったわけ？ その誰かは、私の部屋に入ってきて、冷蔵庫を開けて材料を取り出し、わざわざ料理を作った。

で、それをテーブルの上に置いた。で、自分は出て行った。なんのために？ そんなことをする理由がない。

まさか、さつきマンションの前で声をかけようとした男の子が……。

ありえない。

やっぱり彼にも、ここで料理を作る理由がなかった。

彼の様子からして、真緒が往復している間、ずっとあのままあの位置に立っていたはずだ。

このマンションの誰かを待ってて、その誰かがなかなか来なくて、そこにたまたま通りかかった、住人らしき女の子が猫缶を持ってい

たので、注意しようとしただけ。

普通、猫缶をレジ袋に入れてさげていたら、猫を飼っていると思うだろう。

しかも、猫缶は、三個も持っていたのだ。

「そういえば、さっきの男の子って、まだ外にいるの?」

真緒はふと気になって皿洗いを中断し、窓を開けてベランダに出た。

そこからは、マンションのポーチがよく見える。

真緒に声をかけようとしたあの彼は、まだそこにいた。

そして彼の隣には、もう一人男性が立っていて、彼と話をしていく。

二人とも、真剣な顔をして話していた。

(やっぱり、待ち合わせをしてたんだ)

真緒は、その二人を見下ろした。

彼と話をしている人物は、二十代前半くらい。細身で、彼より幾分背が高い。

長髪に、薄手の黒のコート。コートは足首くらいまでの長さがあるって、ミステリアスで優美な雰囲気。

その人物は、遠くからでも、美形であることがわかる。どこことなく、ビジュアル系バンドのボーカルという感じだった。

桃華と並んで歩いたら、きっと雰囲氣的に似合うかも。真緒は、思ったりする。

たぶんあの人、桃華のストライクゾーン、直球ど真ん中だ。

ああいう感じのきれいな人、桃華の趣味だもの。

真緒の視線を感じたのか、そのビジュアル系は、ちらりと真緒のほうを見た。

途端に、真緒の全身に、鳥肌が立つ。

真緒はあわてて、部屋の中に入って窓を閉めた。

な、なに、今の。

なんか、ぞつとした。

目つき、悪い、あの人。

実は別のどこか異質なところに居場所があるのだが、仕方なしにここに来ていて、そういう立場から冷ややかに真緒を見つめた、というか。

その異質な何かに対する、漠然とした、言い知れぬ不安を起こさせるような目だった。

そして、鋭利な刃物のように、その目は、きらつと光ったのだ。

部屋の中では、ほぼ黒猫が、平和に猫缶を食べている。

真緒は、ほつとした。

それから、気を取り直して、皿洗いの続きを始める。

で――。

焼きうどんと味噌汁を作ったのが、ほぼ黒猫さんだとして、どうやって作ったのかは、謎だけど。

ほぼ黒猫さんが料理を作った理由。

私が『なんとかマグロのムース仕立て』を買ってきたお礼。あと、落ち込んでいる私を励まそうとして、料理を作った。それとも、他に、何か理由がある。

それか、理由なんかなくて、ただ何となく、とか。

真緒が洗い物を終わると、ほぼ黒猫は既に猫缶を食べ終わっていて、再びソファに戻っていた。

食後のグルーミングを始めている。

爪の一本一本を、これでもか、というくらい丁寧に、舌のざらざらで磨いている。

猫缶を開けた器は、空っぽだった。

「よっぽど好きなんだね。でも、この猫缶、お高めだけど。いつもこれ、食べさせてもらってるの?」

>んなわけないだろくと、ほぼ黒猫の背中が答えた（ような気がした）。

真緒は、ベッドの上に寝転がった。

久々の満腹感。

胃が一生懸命、働いている。

だけど――。

冷静に考えれば、猫が焼きうどんと味噌汁を作るはずもない。

たぶん、自分が作ったのだ。帰ってきてから。

なのに記憶が飛んでしまったかなんかで、覚えていないだけなのだ。

落ち込みすぎて、変になっているだけなんだ。

きつとそうに違いない。

でないと、説明がつかないもの。

猫が料理作るなんて。

ホラーか? オカルトか? なんせ、こわすぎる。

少し気だるい満腹感の中で、真緒は無意識のうちに、眠ってしま

った。

ここんどこ、ちゃんと寝ていなかったせいもあった。

夜になると、息が詰まるくらいに不安になり、悲しくなった。

枕が絞れるんじゃないかと思うほど、涙が出た。

でも、今はお腹がいっぱいで、横には平和に毛づくろいをする猫がいる。

随分時間がたって、ふと半分夢うつつで目を開けると、ソファに男の子が座っているのが見えた。

あれ？

ほぼ黒猫さんじゃない。

誰？

年齢は、十二、三歳くらい。おそらく、外国人。

だが、外国人というより、アニメかCGの世界から抜け出てきたという感じもする。

首のところで切りそろえた髪は、真っ黒。天使の輪っかが出来ている。

肌は青白いほど白く、目は、透明な水晶の底に沈んだ金色と緑。彼が着ている衣装は、変わったデザインの白い服と白いマント。やはり、どこかアニメっぽい。

なんだ、ほぼ黒猫さんだ。目でわかった。猫のときと目が一緒なもの。

男の子にもなれるんだ。

じゃ、この姿に変身して、焼きうどんと味噌汁を作ったわけね。

猫のままじゃ、絶対作れないもんね。

ん、納得。

ほぼ黒猫が変身した美少年は、ソファにゆったりと腰を掛けて、テレビを見ていた。

時々声をあげて、「はははははは」と笑っている。

なんか、お笑い番組、見てる。

好きなんだ、お笑い……。

ケーブルテレビにそんなお笑い番組があるなんて知らなかった。
今度、見てみよう……。

真緒は、再び寝てしまった。

第3章 怪しい浪人生

何か、ひんやりとした、ぷにぷにのものが、頬に押し付けられた。真緒は、目を開ける。

部屋の中は、明るかった。

真緒は、携帯に手を伸ばして、時間を見る。

「え？」

朝だった。AM10:00。

「うわ。午後から夜を通り越して、朝まで眠ってしまった」

しかも、ベッドの上で。

しかも、服も着替えず。

しかも、顔も洗わず、歯も磨かず、お風呂も入らず。

「うっ。あり得ない」

真緒は、頭を抱える。

落ち込んでいるとはいえ、そういうことは習慣として、かろっじてやれていたことなのに。

けれども、今から準備しても、十一時からの心理学の講義には、充分間に合う。

真緒のマンションから大学までは、十五分もかからずに行けてしまっただ。

ソファを見ると、ほぼ黒猫は、ちゃんとそこにいた。美少年ではなく、猫の姿で。

さつきの頬のぷにぷにの感触は、たぶん、ほぼ黒猫の前足の肉球だ。

おそらく、ベッドまで来て、起こしてくれたのだろう。

パソコンのモニターには、テレビの番組が映っている。

主婦向けのワイドショーだ。ケーブルテレビの番組ではなさそうだった。

「そういうのも、見るんだ」

けれども、今の時間、ケーブルテレビではお笑い番組をやっていないので、仕方なくワイドショーをかけているのかもしれない。

真緒は、それから、テーブルを何げなく見て、固まった。

また、料理が作ってある。

お皿の上に、小さめのおにぎりが二つ。

それから、具がたっぷり入った味噌汁と、ガラスの器に入ったウサギリんごとヨーグルト。

「や、やっぱり……き、きみが作ったんだよねえ」

ほぼ黒猫は、完全に真緒の反応を無視して、目を閉じ、真ん丸くなっている。

真緒は料理に近づいて、しげしげと眺めた。

おにぎりのひとつには青のりがまぶされていた。

もうひとつのほうにはかけられていなかったが、ところどころ枝豆が見える。枝豆ごはんを作って、それを握ったようだった。

形は、両方ともきれいな三角とはいえない。真ん丸くもなかった。形としては、じゃがいもにいちばん近いかもしれない。

味噌汁には、千切りにしたキャベツと、薄く輪切りにしたピーマン、そして、玉子がまるごと一個、入っていた。玉子は半熟で、白身もほどよく固まっている。

ウサギリんごは、皮の厚さも切り方も、完璧すぎるほどだった。ガラスの器の中で、ヨーグルトのお風呂に、シャープなウサギリんごがつかっている。

真緒は、念のため、玄関のドアを確認した。

鍵はもちろんかかっているし、チェーンもしてある。

誰も外から入っては来られない。

やっぱり今朝のおにぎりも、ほぼ黒猫が作ったということになる。

真緒は、ソファで丸まっているほぼ黒猫を覗き込んだ。

眉間のあたりに、ご飯粒のかけらがくっついている。

真緒は、ほぼ黒猫の前足をつまもうとしたが、その前に前足は素早く引っ込んだ。

「この手で、おにぎりを握ったの？」

猫が、悪戦苦闘しながら、おにぎりを作っている図。真緒はしばし、思い描いた。

確かに苦労して作ったのかもしれないけれど、『猫が前足で握ったおにぎり』というのは、あまり食欲は出ないかもしれない。

「ちゃんと男の子に変身して、作ったんだよね、きつと」

ほぼ黒猫が何者かは不明だが（こうなると、やっぱり、ただの猫であるはずがないわけだが）、真緒のために料理を作ってくれたのは確かみたいだった。

「じゃあ、せっかく朝ごはん、作ってくれたんだし。ありがたういただきます。その前に、きみも朝ごはん、食べる？」

真緒は、二個目の猫缶をお皿に開けた。

床に置くと、ほぼ黒猫はたちまちソファから下りてきて、まぐろムースにぱくついた。

おにぎりは、形は不恰好だったが、塩がきいていて、案外美味だった。

もちろん真緒は、もっと上手なおにぎりが作れるが、そのじゃがいも状おにぎりが何となく、いとおしくて、嬉しかった。

そして、おにぎりの不出来に対して、ウサギリんこのカンペキさといったら。

おにぎりを作ったのは初めてで失敗作になってしまったけど、刃物はしょっちゅう使っているので朝飯前、とでもいうような、とんでもない落差があった。

味噌汁の具が、玉子とピーマンとキャベツ、という取り合わせも意外だった。

でも、栄養たっぷり。

おにぎり味噌汁でも、十分、りっぱなメニューになるんだ。

これも、目からウロコかな。

ちゃんとデザートもついてるし。

朝ごはんを食べ終わったあと、真緒は、窓を開けた。

（きのうのあの人たち。まさか、まだいたりして。そんなわけない

けど)

ベランダから覗いてみて、真緒は小さく声をあげる。
いたのだ。

きのうの、あのビジュアル系。

きのうと同じ場所に、きのうと同じ服装で、立っていた。
隣には、あの男の子はいない。ひとりだけだ。

こ、今度は、あの人が待たされてるんだね、きっと。
真緒は思った。

ビジュアル系が、真緒を見上げる。

きのうはちらつとだったが、今回は、まともだった。
目が、おもいつきり合う。

真緒は、部屋の中に飛び込んだ。
やっぱり鳥肌が、ぞわっと立ってしまった。

な、なんなの、あの人。
まさか、ストーカー？

違う違う違う。そんなはずない。

それは、私の思い過ごし。自意識過剰というもの。
私が窓を開けて見下ろしたから、彼も見上げた。
ただ、それだけ。

きっとあの人、美形なのに目つきが悪いから、いろいろ損してる
んだ、気の毒に。

真緒は顔を洗って服を着替え、カバンに教科書とノートを詰めた。

「私は、これから出かけるの。大学に行くから、夕方まで帰ってこ

れないよ。きみは、おうちに帰る？」

朝ごはんを食べ終えて再びソファに戻ったほぼ黒猫は、相変わらず丸くなっていた。

真緒の問いかけにも、無反応だ。

> ぼくはこのままここにいろよくと、そのまん丸さは告げていた。

「そう。じゃあ、私は行ってくるね。あ、その前に」

真緒は、器に三個目の『紀州のとれとれマグロ・ムース仕立て』を開ける。

「これは、夕飯だからね。それまでに食べちゃだめだよ。お腹こわすから」

真緒は、部屋を出た。

今度は、パソコンはそのままにしておいた。

きつとほぼ黒猫は、真緒が留守の間、ケーブルテレビの番組をずっと見続けるだろう。

たとえ暴れまくったとしても、部屋の中はあれ以上散らかしようはない。

ポーチに降りてみると、あのビジュアル系の美形はいなかった。

「よかった、消えてる」

真緒は、ほっと胸を撫で下ろす。

間近からじろじろ見られたら、一日中鳥肌が立ったまま、直らないような気がする。

「きみ、部屋に、猫、入れたら？」

突然、背後から声がしたので、真緒は飛び上がった。

振り向くと、きのうの天パの男の子が、そこにいた。

きのうはラフなパーカとジーンズだったが、きょうはダークグリーンのジャケットに黒のパンツ、首には空色のマフラーを無造作に巻きつけている。

「な、なんですか。あなた、大家さんの回し者？」

真緒は、彼に言った。

そして、きのうはほとんど無視していたので、あまり観察も出来なかったその男の子を遠慮なく眺める。

思ったより美形だ。結構顔立ちが整っている。

だが、伸ばしっぱなしらしい髪が、それをぶち壊している。

もう少し髪を切ったら、もっと素敵なのに。

真緒は、他人事ながら、ちょっと残念に思う。

眼鏡の奥の彼の目は、日本人離れた紅茶色だった。そして、白目は薄いブルー。首に巻いているマフラーの空色が映っているわけでもなさそうだ。

「別にぼくは、ペット禁止とか、そういうことを言いたいわけじゃない。ここの大家さんも知らないさ」

彼が言った。

「問題は、あの猫だ」

「あの猫？　ほぼ黒猫さんのこと？」

「ホボクロネコ？」

彼が変な顔をしたので、真緒は思わず笑ってしまった。
そんなこと言っても、わからないよね。

あ。

そういえば、私、笑ったのって、久々かも……。
真緒は、ふとそのことに気づく。

「私が勝手に呼んでるの。前足の先と尻尾の先が白いだけで、あとはほぼ黒いから、>ほぼ黒猫<さん。あなた、もしかして、あの猫の飼い主？」

「違う。あれには、ちゃんと別に飼い主というか、主人がいる。あの猫は、今もまだきみの部屋に？」

「いるよ。たぶん、今は、テレビ見てるんじゃないかな」

「きみ、よく朝まで無事でいられたな」

彼が、真剣な表情をして、言った。

「どういう意味？」

「あの猫は、普通の猫じゃない。魔猫だ」

「マビヨウ？」

「つまり……化け猫ってことだ」

「化け猫。あ、そうなんだ。それで、パソコン使ったり、ケーブルテレビの番組にチャンネル変えたり、料理作ったり出来るんだ。納得」

「納得するな。料理まで作ったのか、あの猫っ」

彼は、くわつと口を開ける。

「うん。きのうは、焼きうどんとキムチのお味噌汁作ってくれたよ。今朝は、青のりのおにぎりと枝豆のおにぎりと、それから玉子とキヤベツとピーマンのお味噌汁。ウサギリんごとヨーグルトも付いた。でも、作ってるところは見ていないけどね。気が付いたら、料理が置いてあったから」

「で、き、きみ、その料理、食べたのか？」

「せっかく作ってくれたんだもん。おいしそうだったし」

「普通、食べるか？」

彼は腕組みをして、あきれたように真緒を見下ろした。

「どういう神経をしてるんだか。猫が料理作るなんて、変だと思わなかったのか？」

「うーん。今ちよつと、私、感覚おかしくなってるかも。なんせ、とんでもなく落ち込んでるから。化け猫がやってきて、料理作った

くらいでは、びつくりしないかもね」

彼は、ますますあきれ顔になる。

「でも、あなたのお友達は、ちょっとこわかったけど。あなたの友達、目つき悪いよ」

真緒が、彼と話していたビジュアル系のことを思い出して言うと、彼は、眉を寄せた。

「まあ、彼の目つきがきついのは、あっちの影響が強いからだけど……。別に悪気はないよ。いい人だ。ぼくが保証する」

あっちの影響？

やっぱり、ビジュアル系バンドでもやっているのだろうか？
それに保証するたって、そもそも、そう言っているあんたが、ものすごくうさん臭い。

真緒は、しらっとその謎の男の子を見上げる。

「彼はね、きみを守っていたんだ、一晩中」

「はああ？」

何を言い出すんだ、この人は。

「なんで、私があの人を守ってもらわなくちゃなんないのっ！」

「あの猫がきみに手を出したら、すぐに阻止できるようにね」

「手を出す？ 阻止？ ほぼ黒猫さんが、私に何をするっていうん

だよ」

「きみは知らないだろうけど、あの猫は、危険なんだ」

「危険？　なんで？」

「その……」

彼は、ちょっと空を見上げるような感じで考えていたが、考えつかなかったのか、それとも真緒に何かを説明するのを避けたのか、結局、こう言った。

「それはやっぱり、化け猫だからさ」

「あ。私、大学に行かなくちゃ。遅刻するから」

真緒は、時計を見るふりをし、足早に歩き出す。

彼は、あわてて真緒の隣に並んだ。

「ついてこないですよ。あなたたちのほうが、よっぽどあやしいんだから」

「きみは、ぼくらよりも、料理を作る化け猫を信用するのか？」

「当然でしょ。別に料理には毒も入ってなかった。悪意で作ったんじゃないってことは確実だもの。誰かに料理を作ってあげるとか、誰かに作ってもらった料理を食べるのって、とても大変なことなんだから。その人の命の糧を作ってあげること。作ってもらうこと。相手を信頼してなかったら、そんなの出来ない」

「じゃあ、きみは、例えば、ぼくがきみのために料理を作ったら、信用するのか？」

真緒は立ち止まって、彼をしげしげと見上げた。

「しないと思う。最初からあやしいもん。でも、あなた、料理、作れるんだ？」

「……カップラーメンなら」

彼は、真緒に見つめられ、少しのけぞって、弱々しくつぶやいた。

「そういうの、料理っていうか？」

真緒は、再び早足で歩き始める。

彼は、あきらめずに、真緒の隣に肩を並べる。

「きみ……。S大の学生？」

彼がたずねた。話題を変えるらしい。

「そうだけど。もしかして、あなたも？」

「いや」

彼は、首を振る。

「高校生？」

「いや。今は予備校に通ってる」

「浪人してるんだ」

もうあと三ヶ月もしないうちに、大学入試が始まる。

推薦入試ならとうに終わっているし、一次日程での試験を行う大学もそろそろ出始める。受験生には追い込みの時期だ。真緒も、高校三年だった去年の今頃は、結構勉強をしていた。

受験生は、この時期何かと気が立っているもの。しかも、浪人生なら、なおさらだろう。

けれども、だからといって、化け猫がどうか言い出して、見知らぬ女子大生にふらふら話しかけてていいのか？

「S大は、第二志望だったな」

彼がつぶやいた。

真緒は、ちよつとむっとする。

私は、第一志望だったぞ。

S大だって、世間的には、レベルはそんなに低くはない。

「あつそ。じゃあ、第二志望のS大には受かったけど、第一志望のどこかものすごくレベルの高い大学に落っこちたから、浪人してるんだ」

「第一志望はもちろん落ちたし、第二志望のS大にも落ちた。それどころか、第五志望まで、見事に全部落ちた」

彼が言った。

それは、大学の選び方が、最初から間違っているのではないのか？
真緒が思った途端、彼はすぐに言い訳する。

「ちよつと去年の今頃からごたごたがあつて、勉強に集中できなかったんだ」

「それは、ご愁傷様でした。そのごたごたが何なのかは、興味ないから」

「きみ、高校、K学院だった？」

彼がたずねた。

「なんで知ってるの。ますます、あやしい」

「S大の入試のとき、きみはぼくの二つ前の席だった」

「……」

そんなことを言われても、真緒のほうは、覚えているわけがなかった。他の高校の受験生のことなんて。

入試のときに、そんな余裕など、あるわけではない。

しかも、第一志望の大学の入試なのだ。

緊張していて、試験官の顔さえ、定かではない。

桃華だって、同じ教室で受験したはずなのだが、お互い、まるで記憶がないのだから。

なのに、なんでこの人は、真緒のことをわざわざ覚えているのだ？

「ご、誤解しないで。K学院の制服は、目立つからだよ」

彼が、言い訳するように言う。

確かに、真緒の出身高校の女子の制服は、有名だった。

『あの高校の制服は、かわいい』という評判が、他府県まで広がっている。

紺色のセーラー服で、白い衿の端に星マークの入った、ちょっとレトロっぽいデザイン。

その制服にあこがれて、入学してくる女の子も多い。

「じゃあ、あなたとは同い年なんだ」

「でも、ぼくは浪人したから、学年は一つ下になってしまっわけだけだね」

なんか、普通に、雑談してる、この謎の男の子と。

真緒は、改めて、思った。

正体もわからない、あやしい子なのに。

でも、男の子と並んで歩きながら話をするのは、久しぶりだ。彼以外の男の子と……。

学生たちの人数が、風景の中に増加してくる。大学が近い。

「で、あなた、何者なの？」

真緒は、彼にたずねた。

「ぼくは、その……予備校に通ってる浪人生」

「なんであの猫が化け猫だって、知ってるの？」

「それは……知ってたから」

「わけわかんない」

受験生なのに、国語、大丈夫か？

真緒は、少し心配になったりする。

「ごめん。きみの質問には、答えられない」

彼が、ちよつとうなだれ気味に言った。

「あ、そ。じゃあ、聞かないけど」

「だけど、あの猫には、かかわらないほうがいい。このまま部屋においといたら、きみは明日の朝、冷たくなってるかもしれないよ」

「こわいこと言うね。でも、ほぼ黒猫さんは、そんなことしないよ」

「なんでわかる？」

「なんとなく」

彼は、真緒の答えを聞いて、救いがたいという感じで、ため息をついた。

いつの間にか、大学の門の前だった。

真緒は、彼を振り返った。

「部外者は入れないからね。最近、大学も厳しいんだから。私たちだって、学生証は常に携帯しておくようにって、きつく言われてる。

ここでお別れだね。じゃあね、予備校に通ってる、謎の浪人生さん」

真緒は、他の多くの学生たちに混じって、大学へと入った。

ちら、と振り向くと、浪人生は門の前で、学生の流れに逆らって、ただひとり、突っ立っている。

同じような年齢の学生たちの中で、彼の存在は、妙に浮き上がっているように、真緒には思えた。

その浮き上がり方は、浪人生だからという理由だけではないような気がした。

第4章 三人でランチ

心理学は一般教養科目なので、他の学科と合同講義になる。教室も、広いところが用意されていた。

毎回欠かさず出ていれば、必ず単位は取れるという、手堅い科目でもある。

けれども、出席は取るが、カードに学籍番号と名前を書いて提出するだけなので、別人による代理出席も、当然可能。全く出席をしたことがなくても、試験の出来によつては優を取れるという話もあった。

試験だつて、教科書・ノート持込み可らしい。受験勉強をくぐり抜けて来た真緒には、未だにその大らかな仕組みが信じられない。もしかして教授は、学生の答案用紙を扇風機で飛ばして、遠くへ飛んだ順に、優・良・可をつけているんじゃないかという噂が、まことしやかにささやかれている。

心理学の講義が終わると、桃華が背後から現れた。後ろのほうの席で、講義を聴いていたらしい。ということは、実は遅刻して、そつとドアに近い後ろの席に座ったのかもしれないかった。

「久しぶり」

桃華が真緒を見下ろして、にっこり笑った。

きょうの彼女は、薄手のケープ付きのコートを着ていた。シャーロック・ホームズが着ているようなインバネスコートをもうちよつとかわいらしく、女の子向きにした感じだ。コートの下に

は、編み上げブーツ。

頭には、ベルベットのヘアバンド風ヘッドドレス。

だがそれは、よく見ると、三角形の突起がさりげなく二つ、くつついている。言わずと知れた、猫耳だった。

「なんか、痩せたね。ちゃんとご飯、食べてる？」

「うん。ここんとこ食べれてなかったけど、きのうは焼きうどんとキムチの味噌汁を食べた。きょうは朝から、おにぎりと、具沢山の味噌汁の朝ごはんを食べてきたし。デザートもしっかりね」

「朝からご飯？ それは、いい傾向だ。いつも真緒は、コーヒーか、よくてもそれプラストースト一枚だものね」

確かに、真緒が朝からボリユームのあるメニューを食べるのは、珍しかった。いつも朝は、そんなに食べられないのだ。

でも、今朝は、そんなことを考えることもなく、食べてしまった。その朝ごはんを作ったのは、猫なのだけれど。

真緒は、桃華に、猫が焼きうどんやおにぎりを作ったことを打ち明けようとしたが、やめておいた。

そんなことを言おうものなら、桃華の手が真緒の額に伸びてきて、熱がないか、はかろうとするに違いない。桃華は外見とは違って、結構現実的なのだ。

だいたい、本当に猫が料理を作ったのかという疑問は、まだ真緒の中でもややもやしている。

実際、料理を作っている現場を見たわけではないのだ。見たとしても、素直に信じたかどうかはわからないが。

ソファに座って爆笑していた美少年だって、やっぱり夢だったのかもしれない。

あの浪人生から化け猫だと聞かされても、あまりにも現実離れしすぎている。

第一、あの浪人生の存在さえ、現実だったのかどうか。あまりにも落ち込みすぎていて、幻を見なかったとは言い切れない。

「次のシナリオ論、休講だよ。さっき、学生課の人が掲示板に貼ってた」

桃華が言った。

「やっぱり、って感じだけど」

シナリオ論の講師は、よく名前の知られた劇団を主催していて忙しいらしく、休講がやたらと多かった。

知る人ぞ知る有名人らしい。夏休みには集中講義をしたので、学生からは大ブーイング。

何せ、その補講だけのために、実家にも帰れず、バイトも出来ず、暑期中、大学まで出てこなければならぬのだ。

秋からは、ちゃんと講義をしないと言い訳していたのだが、やっぱり休講は相変わらずだ。冬休みも集中講義になるかもしれない。

「多忙な人みたいだもんね。この間、テレビにも出てたよ」

「結局、客寄せパンダじゃん。それわかってて、あの授業を選択した私たちも私たち、だけど」

真緒と桃華は、心理学の教室から出て、大学の広い構内を歩いた。著名な建築家が設計したという大学の建物は、どこか、SF映画に出てきそうな未来都市の雰囲気がある。

秋の澄み渡った青い空が、大学の上をどこまでも覆っている。

「シナリオ論休講だし、日本文学史もエスケープして、帰ることにした」

と、桃華。

「え？ 帰るの？」

真緒は、残念に思う。

桃華にいつぱい話をしたかったのに。いろいろ聞いてほしかったのに。

「バイト入れたんだ。急に風邪で来れなくなった子がいて、困ってるみたいだしね」

桃華は、ケーキ屋さんでバイトしている。

そんなにケーキが好きというわけではなさそうなのだが、その制服が、黒のふわっとしたロングのワンピースに白いエプロンドレス、白のレース付きのヘッドドレスという、シックで古風なメイドスタイル。それだけの理由で選んだらしい。

実際、その制服は桃華に妙によく似合っていて、その制服で店の外を歩いていてメイドカフェの店員に間違われたことも、一度や二度ではないらしかった。

「だいたいみんな、帰ったよ。でも、一旦帰って、日本文学史に出てくる組もいるみたいだから」

「そう。私は日本文学史は出るよ。せつかく来たんだから。でも、それまでどうしようかな」

「とりあえず、お昼は一緒に食べよう。で、知り合い？」

桃華が、真緒の横を指差した。

そこには、いつの間にか、あの浪人生が立っていた。両手で大事そうに、薄緑色の分厚い書類袋を抱えている。

「な、なんで、あなたがここにいるっ！」

「真緒に向かつて手をあげながら近づいてきたから、てっきり知り合いだと思ったんだけど？ 一応、知り合いなんですよ」

桃華が言って、啞然として突っ立っている真緒と、その浪人生を見比べる。

「し、知らないよっ。うちのマンションの前に立ってて、さっきほんの少し話をしたただもん。あとは、一浪してる予備校生だったことと、入試のときに、私の二つ後ろの席だったってことぐらいとかっ」

「それだけ知ってれば、十分知り合いでしょうが。でも、入試のときに、後ろの席？ じゃあ、私たち三人、同じ教室で試験受けたってことか」

桃華は、じいっとその浪人生を観察し始める。

「でも、きみたちは合格したけど、ぼくは不合格だった」

浪人生が言った。

「それは、気の毒」と、桃華。

「ど、どうやって入ってきたのよっ！」

真緒は、彼を睨む。

けれども、彼が幻でなかったことに、真緒は確かに安堵していた。ということは、化け猫も現実ということになる。

「来年この大学を受験するんですって言ったら、警備員さんは、そんなにに入れてくれた」

彼が言った。

「それから学生課に行ったら、願書をくれた。大学内を見学してもいいですかって聞いたたら、どうぞごゆっくりって。親切に、構内の地図までくれたよ」

うう。そういう手があったんだ。

真緒は、頭を抱えたくなる。

「どっちにしろ、来年、この大学の入学試験は、ほんとに受けるから。願書もらうのは二回目だけどね。もう夏のうちに、もらってたから」

「第二志望で受けるんでしょ」

真緒は、意地悪く彼に言ってみる。

「うん。でも、第一志望の大学にはレベル的に到底入れないと思ってる。運がよければ受かるかなって程度。だから、本命はこの大学だよ」

「浪人したんだ。大変だね」

自身も一浪だった桃華が言う。

「一緒にお昼ご飯、どう？ 学食も見学してたら？」

「あ、喜んで」

彼は、本当に嬉しそうに言った。

真緒は、ますます頭を抱えなくなった。

大学には、学生食堂は二箇所あった。カフェも、三箇所くらいある。

第一食堂は玄関に近く、いつも混んでいたが、第二食堂は奥まった場所にあり、学生の人数も少なめで、ゆったりと食事が出る。

ガラス張りで明るく、外の広場の芝生の緑や木々、花壇もよく見えた。

真緒と桃華、そして謎の浪人生の三人は、第二食堂をめざして歩いた。

浪人生は真緒たちから少し遅れて、遠慮がちにうしろからついてくる。

「一浪ってことは、歳は真緒と同じだね」

桃華が言った。

「そういうことになるね」

「真緒、彼氏と別れたところなんだから、次、あの子とつきあっちゃったら？」

と、桃華。

「な、なんで、そういう展開にしようとするわけ？　だいたい、あの子は、浪人生で、受験生なんだよっ」

二人の会話が後ろの浪人生に聞こえているのかどうかは、わからなかった。だが、昼休みの学生たちの賑やかさにかき消されて、話の内容までは聞こえていない確率が高い。

何しろ昼休みには、さまざまな同好会や研究会、劇団のメンバーが、我先にとキャンパス内に繰り出してくるのだ。

彼は、珍しそうに周囲を見回しながら、ついてきている。

「前の彼氏よりは、性格は、はるかにマシとふんだ。顔も、割といい線いってる。背の高さも。でも、タダモノじゃないって感じはするけど。今は浪人してても、来年の春には大学生でしょ。ここの大学だか、もつと高いレベルの大学だか、低い大学だかは、わからないけど。見てくれたって、大学生になれば、もう少し、ぱりっとするかもしれないし」

「あのね、私は、今付き合ってる彼とは、まだ終わってないの。別れたって、まだ思っていないから」

「じゃあ、もう終わらせたら？　こう言っちゃなんだけど、彼氏の

中では、もうとつくに終わってると思うよ」

桃華は、相変わらず、ずばりと言う。

「やっぱり、そうなのかな」

「メールも来ないし、電話にも出ないんでしょ」

「うん……」

「それは、もう終わりにしようってことだよ。そりゃあ、たぶん、修羅場がこわくて逃げてるとか、めんどうなことは避けたいっていうのも本音だろうけど。メールにしろ電話にしろ、そういう態度示してるんだから、いい加減、察しろってことだよ」

「察しろ？ 察せない。そんなの、納得いかない」

「真緒は、完璧主義者だもんね。こだわりが強いっていうか。融通がきかないっていうか。でも、彼なりのやさしさだと思うよ。ずるいけど。そうやってお互いに察して自然に別れて行くっていうのが、オトナの別れ方だって。最近読んだ本にも書いてあったな」

「自然に別れる？ 終わりの言葉もなく？ そんなの、いやだ。そんなのがオトナの別れ方なら、そんなオトナになんかなりたくない」

「じゃあ、きちんと納得が行くように、自分で終わらせるんだね。たとえ修羅場になっても、真緒が満足するなら、それでいいじゃん。でないと、いつまでたっても、次には踏み出せないよ。ま、私なら、彼の部屋のドアの前に立って、待ち伏せするかな」

「そついうの、下手するとストーカーでしょ」

「むろん、真緒流の、別の方法を考えればいい」

三人は第二食堂に入り、窓際の明るい場所に席を取った。

「定食より、どんぶりがおすすめだよ。少し時間はかかるけど」

桃華が、浪人生に言う。

「どんぶりか。いいな」

「お金がないなら、シンプルに玉子どんぶり。ちょいリッチなら、木の葉どんぶりとか、カツ丼とかだね」

「ベタだけど、受験生だから、カツ丼にするよ」

真緒は、玉子どんぶりの食券を買って、浪人生と一緒に学生の列に並んだ。どんぶりは人気のメニューで、そこだけいつも列が出来ている。カウンターの中では、ぴしっと糊のきいた白衣に身を包んだおばちゃんが、懸命にどんぶりを作っていた。

桃華はきつねうどんにしたので、先にテーブルに戻って、ひとりで食べ始めていた。

謎の浪人生は、出来たてのカツ丼を無邪気に頬張る。

この人、本当に幸せそうに、嬉しそうに食べるんだ。

真緒は、ちよつとあきれて、彼を眺める。

「今度、遊園地に行こうよ、真緒」

もう既に、きつねうどんを食べてしまった桃華が提案した。

「私の服、貸してあげるから」

「服？　もしかして、ゴスロリの？」

「絶対、真緒、似合うって。フリルひらひらのブラウスとか、猫耳帽子とか。ほんとそういうの、好きなんでしょ？」

「やめて。そっちの世界に引き込もうとするのは」

「そういえば、きみ、似合いそうだね、ゴシック・ロリータっての？　高校のセーラー服も似合ってたけど」

浪人生が、カツ丼を食べながら、言った。

真緒は、彼をぎろつと睨む。

「そんな格好が出来るのも、長い人生の中で、今だけだからね。今だから許されるし、今だから似合う。だったら、今ちよつとだけやってみてもいいんじゃない？」と、桃華。

こういうことを言うときの桃華は、やはり真緒よりも、はるかに年上に思える。

人生というものをある程度わかって、冷静に突き放して眺めたよ
うな、大人びた台詞。

真緒は、今の状況をこなすだけで精一杯で、ほんのわずかな先の
未来さえ、捉えられないというのに。

「私がそついうのにはまってるのは、一浪から開放されて、はじけてるってこともあるわけ。あなたも来年の春には、はじけてよね」

桃華は、浪人生に声をかけた。

「うん。ほどほどに、はじける」

彼は、残りのカツ丼をかきこみながら、答えた。

「じゃあ、私、バイトがあるから」

桃華は、空になったきつねうどんの器が入ったトレーを、片手で持ち上げた。

「ごゆつくり、浪人生さん。次の授業休講だし、真緒、大学の中、案内してあげたら？」

そして、桃華は真緒の横に回って軽くかがみ、真緒の耳元に口を寄せた。

「な、なに」

「やつぱり、あの子と付き合ったら？」

桃華は、ささやいた。

「だからあ……」

「性格、結構真面目そうだし、きっと真緒と合うよ。タダモノじゃないって予感はないけど。あの子、絶対、真緒に気があると思

うな。でなきゃ、入試の時に一回見かけただけで、覚えてるわけないもん。失恋から手っ取り早く立ち直るには、新しい彼氏を作るのが、一番」

「だから、そういう展開にはならないって」

「わかんないよ。真緒、女の子はね、クールに、したたかに、かわいく生きていかなきゃだめだよ」

桃華は、にっと笑って、真緒の肩をぽんぽんとたたいた。そして、行ってしまう。

後には、真緒と、謎の浪人生が残された。

「次の授業、お休みってこと？ キュウコウってのは？」

彼がたずねた。

「そう。シナリオ論なんだけど、先生が来れなくなっただけみたい。でも、その次の日本文学史はあるから」

「なんか、わくわくするなあ。シナリオ論か。想像もつかない。それに、日本文学史。やっぱり、日本の文学を系統立てて、教えてくれるの？」

「私も最初、そう思った。でも、それはタイトルだけ。先生が源氏物語専門の学者さんだから、4月からずっと、源氏物語しかやってない。たぶんずっと、最後まで源氏物語」

「密度の濃い源氏物語か。いいな。来年には、ここにいたいな」

彼が、夢見るように呟いた。

「ここにいられるように、次回はしっかり、頑張ってください」

けれども、彼が一学年下に入ってきたら――。

学年が違っても、同じ学科だったら、合同の授業もある。

同じ授業を受けることになるかもしれない。

それこそ、二つ後ろの席とか。隣の席とかで。

「悪いけど、大学の案内なんて、しないから」

真緒は、彼に言った。

だいたい、しなければならぬ理由なんてないのだ。

「いいよ。去年の夏と今年の夏、オープンキャンパスで来たときに、だいたい見たから。それより、この大学の中で、行きたいところがあるんだ」

彼は、さりげなく真緒の食器を自分のトレーに移し、それから真緒のトレーもその下に重ねた。二人分の食器を持って、彼は席を立つ。

「ちょっと、ちょっとお。その、あなたの行きたいところに付き合うなんて、言っていないから。あなた、帰らないの？」

「帰る？ あの猫をきみの部屋に置いたまま？ それは出来ないな」

彼は、食器を返却口に置いた。

そして、大声で、「ご馳走さまでした！」と叫ぶ。

カウンターのおばちゃんが、どんぶりを作りながら、にやっと笑って、頷いた。

「じゃあ、どうしたいわけよ？」

真緒は、彼にたずねた。

「あの猫は、あの猫の主人のところに返す。だから、あの猫を引き取るために、きみと一緒に、きみの部屋に行かなきゃならない。でもきみは、まだ授業があつて帰れない。だから、一緒にいる」

「別に一緒にいなくてもいいと思うけど」

「次の授業、お休みでしょう。天気もいいし、ちょっと付き合つてよ」

彼は、真緒の手首をつかんで、歩き始める。

「きみ、手首細いんだね。強く握ると折れそうだ」

「女の子は、体のつくりが華奢なの。で、天気なんて、特に関係ないでしょ？」

「ものすごく関係があるんだ。ほら、あれ」

浪人生は、食堂を出た真正面にある、積み木のような建物を指差す。

「あの屋上に、行ったことある？」

「ない。だって、他の学科が専用で使つてる建物だもの」

「どこの学科に所属してるかなんて、ぱっと見ただけではわからないよ。どの学科の誰って、IDカードを首から下げてるわけじゃないでしょうが」

彼は、学生の海を掻き分けながら、真緒をひっぱって、その建物の中にどんどん入って行った。

第5章 屋上の公園

エレベーターの扉が開き、学生たちの賑やかな一団が降りたあと、彼は中に真緒を押し込んだ。

それから慣れた調子で、Rのボタンをポンと押す。

「あなたは、ここ、来たことあるの？」

「うん。今年のオープンキャンパスの日だね。でも、そのときは雨だったから」

エレベーターが屋上に着くまで、真緒と彼は、しばし黙り込んだ。機械の静かな音と微かな振動が、直方体の閉じた空間に響く。

エレベーターが開くと、明るい光がいつぱいに降り注いだ。格子のガラスの向こうに、青い空が見える。

そこから外に出ると、コンクリートの地面が広がっていた。秋の、さわやかな風が吹き渡る。

真緒は、思わず、小さく歓声をあげた。

「ちょっと素敵な空間でしょう」

彼が笑った。

そこは、おしゃれでアートっぽい公園のような広場になっていた。面積も、こじんまりした公園、という程度ではなく、屋上いつぱいを使った広いものだ。

ところどころベンチがあり、その上には、日除けらしい、カラフルな平たい屋根も備え付けてあった。

ベンチは、太ったナメクジのような形をしていて、表面には鮮やかな色彩の、細かいタイルが張られている。

日除けの柱も同じようなモザイクになっていて、巨大な動物の足のように見えた。

広場の真ん中あたりには、どこかUFOを思わせる形状のガラスのドームがはめ込まれていた。その下は吹き抜けになっているようだ。

覗きこんでみると、何層にもなった手すり重なっていて、大勢の学生たちが、水の底で動き回っているように見えた。

屋上のベンチに座っている学生たちは、それぞれ、食事をしたり、昼寝をしたり、本を読んだり、思い思いの穏やかな昼休みを過ごしている。

「こんなところがあったなんて。全然知らなかった」

「それは、半年ほど、損をしたかもしれないね」

彼は言っ、空いているベンチに座る。

「あー、いい気持ちだ」

彼は、両手を頭の後ろで組んで、ベンチにもたれかかった。

真緒も、彼の隣に座る。もちろん、少し距離を開けて。

「きみが、化け猫が料理を作ってもびつくりしないくらい落ち込んでいる理由って、彼氏とうまくいってないせいなんだ」

彼が言った。

聞いていたのか？ 桃華との話の内容を。

細かく聞き取れる距離ではなかったはずなのに。

真緒は、横目で彼を見る。

「あなたには関係ないものね」

「気を悪くするかもしれないけど」

彼が、真緒のほうを向いて、言った。

「ぼくには、ぜいたく、というか、もったいなく思える」

「ぜいたく？ もったいない？」

「だって、ぼくは、今のきみの立場になりたくて、必死になって勉強してるのにさ。きみの立場になるために、一年、いろんなことを我慢して、不安定でやりきれない心の状況を何とか耐えながら、毎日を過ごしてる。もう少しだって、自分に言い聞かせて。大学に受ければ、楽しい学生生活が待ってるって。なのに、きみはその立場にありながら、そういう状況」

「そうだね。あなたの立場では、失恋して落ち込んでるなんて、馬鹿みたいだって思えるかもしれないね」

きのうも、似たようなセリフを言った。あの猫に向かって。

けれども、猫は無反応だったが、隣の浪人生は、ちゃんと真緒のほうを見て答えてくれた。

「別に、馬鹿みたいだとまでは思ってるないよ。ただ、もったいない

なあって」

「もっと楽しそうで、大学生活を満喫している見本だったらよかったね」

「まあ、ぼくは、女性と付き合ったことないから、そういうことはよくわかんないけどね」

「じゃあ、無事大学生になったら、どんどん恋愛して、失恋して、とめどなく落ち込んでみてよ。今の私の気持ちがわかるから」

「うん。そういう経験もしてみたい。でも、なんで、一人暮らしなんてしてんの？ K学院は、ここからそう遠くはないよね。高校のときから、一人暮らし？」

この人、結構プライベートなことを突っ込んで聞いてくる。
真緒は思ったが、素直に答えた。

「実家は、この近所。でも、お父さんが転勤で九州に行くことになって、お母さんもついて行ったから、実家には、今は留守番がてら、兄貴夫婦が住んでる。一緒に住まないかって言われたけど、やっぱり、家を出ることにしたの。兄貴のお嫁さんとは、仲が悪いわけじゃないけど、小姑は消えることにした」

「気を使って、一人暮らし、か」

「でも、一人暮らしは楽しいよ。時々、親や兄貴のお嫁さんが、日用品や食料を送ってくれるし。彼氏も遠慮なく呼べる。化け猫がご飯作ってくれたりもするしね」

「化け猫がご飯作ってくれたら、びっくりして、警戒しなきゃだめだよ」

彼が忠告するように言った。

「何であの猫は、私に料理を作ってくれるの？」

「知るもんか。なんか作りたい理由でもあるんだろ」

「やっぱり、私が落ち込んでるから、慰めようとしてくれたとか、元気づけようとしてくれたとか、冷蔵庫の残り物で作る、超簡単レシピを伝授してくれようとしたとか……」

「その確率はゼロだと思うね。あれが、人間の女の子が落ち込んでるからって、かわいそうに思って、料理を作るようなやつであるわけがない」

「ほぼ黒猫さんのこと、相変わらず悪く言っただね」

「知ってるからさ、あいつのことをいろいろと」

「でも、あの猫、人間に化けたら、すごい美少年なんだね。化け猫って、髪がバサバサで、猫耳はえてて、着物きてて、両手を招き猫にしてて、行灯の油を舐めるってイメージあるけど、全然違う」

真緒は彼に向かって、子供の頃にテレビで見た化け猫の真似をして見せた。

「それは、古い映画の観すぎだろ。だけど、あいつのそういう姿も見たのか。こつちの世界でその姿になって、人間にそれを見せるな

んてことは、普通、ありえないことなのに」

「ふうん。ほぼ黒猫さんが美少年に化けるのは、正直、まるっきりの夢だと思ってたんだけど。どうやら本当らしいね。あっさり肯定するんだもの」

真緒は、少し彼に接近して、彼の顔を覗き込む。

「な、なんだよっ」

彼は明らかに狼狽して、後ろに下がった。

「だいたいね、マビヨウだのバケネコだの、私に言った時点でアウトだよ」

真緒は、彼に言う。

「え？」

「あの猫は、ぼくが飼い主だから返してくれて、そう言えば、丸くおさまることなのに。そしたら私も、何の疑問も持たずにほぼ黒猫さんを返しただろうし、料理もケーブルテレビのチャンネルも美少年も、全部夢だったと思ったのにね。そして、私たちはそれ以上接触することなく、それぞれの生活に戻った。わざわざ化け猫だつて、本当のことを言つて、ややこしくしなくてもよかったのに。失敗だったね」

「ぼくがあの猫を飼つてゐるって？　そ、そういうウソは、うまくつけないし、ウソを裏づけ出来るような立ち回りも、当然出来ない」

彼が、少しあせり気味で言う。

真緒は、くすつと笑った。

やっぱりこの人は、真面目な人なのかもしれない。

桃華の見立ては、当たってるかも。

「それは修行が足りないってことかもしれないけど。仲間によく言われる」

彼が呟いた。

「十八やそこらで、修行が足りてるほうが、おかしい。ね、謎の浪人生さん。もういい加減、全部話してくれてもいいでしょ。中途半端はいけないと思うな」

真緒は、言った。

「全部って？」

「あなたの正体とか、ほぼ黒猫さんの正体とか、それから、あなたの、目つきの悪いビジュアル系のお友達の正体とか。もう、予備校に通ってる浪人生、なーんて、しらじらしく言わないでよね。別にあなたが吸血鬼でも、狼男でも、ぬらりひょんでも、今の私はびつくりしないよ」

「だけど、話しても信じてはくれないだろうから」

「化け猫を信じさせといて、何を今さら。さ、どうぞっ。真剣に聞いてあげる。だいたいあなたは、私のプライベートな話を結構知っちゃったわけだから、不公平でしょ。あなたにもプライベートなことで、話してもらってから」

「やっぱり、修行が足りない……」

彼は、深いため息をついた。

「でも、正直、きみに聞いてもらいたいというのは、少しある。誰かにこの話をするのは、初めてだな」

そして、その謎の浪人生は、彼の『プライベートな話』をし始めた。

それは、もちろん、不思議で奇妙な話だった。

「去年の今頃、ばあちゃんが死んだ」

彼が言った。

屋上から見える空は、どこまでも青く、高かった。

ごく薄い繊維のような雲がいくつも浮かんでいて、巨大な割り箸で空をぐるぐるかき混ぜると、雲の綿菓子が出来そうだった。

太陽の光は金色を帯びて、コンクリートの広場に降り注ぐ。

昼休みの終わりを告げる鐘が鳴り、学生たちのほとんどは、その広場からいなくなった。

謎の浪人生は、再び両手を頭の後ろで組んで、ナメクジ形のベンチによりかかる。

真緒も、うしろにもたれてみる。タイルとコンクリートで出来たモザイクの背もたれは、ひんやりとしていた。

「それまでのぼく的生活が変わったきっかけは、そのことだったな。

勉強も手に付かなかったし」

「もしかして、受けた大学を全部落ちたのは、おばあさんが亡くなったショック？」

「どれだけ、おばあちゃん子なんだ。第一、ばあちゃんが死んでから入試まで、数ヶ月はたってるだろ」

彼は、突っ込みを入れる。それから、言った。

「ばあちゃんは、普通の人間じゃなかった」

「え……」

「きみは、宇宙人とかUFOとか、信じるほう？」

「おばあさん、UFOでやってきた宇宙人……？」

「そうじゃなくて」

「ごめん。真面目に聞くから。宇宙人もUFOも、存在は信じるよ。少なくとも、化け猫よりは現実感はあると思う。化け猫に会った今でも」

彼は、空の遠いところに視線を漂わせた。

「こことは違う世界があるんだ。それは、何千万光年も彼方の宇宙にある、惑星なのかもしれない。地球と隣り合ったパラレルワールドってところなのかもしれない。本当はどこにあるのかは、わからない。でも、その世界は確かに存在しているんだ。そこは地球とよ

く似ていて、地球と同じように、人間も動物も住んでいる。人間とは別に、はるかに優れた文明を持った、少数の種族もいる。その種族の人々は、特殊な能力を持っていて、あちこちの別の世界と自分たちの世界を繋いで、自在に行き来が出来る。彼らは、地球にもやってきていて、人間に混じってこの世界の様子を観察したり、実際に住んでみたりもしている。目的は、だいたい暇つぶしというか、興味本位みたいだけどね」

「じゃあ、やっぱり、その人たちは宇宙人ってこと？ その世界がどこか地球以外の惑星なのだとしたら」

「そうなるね。たまに、空を飛ぶ機械の船ごとやってくる人たちもいるから、それはUFOってことになるかもしれない。だけど、そうやって別の世界に入りして、その別の世界の秩序を乱すものたちも現れた。別の世界の人たちを傷つけたり、死なせたりね。それはルール違反だ。別の世界の人たちに手を出してはいけないという暗黙の取り決めがあるから。そこで、そういう悪さをするやつらの行動を阻止するために、監視する役目の人たちを、そこと繋がっているそれぞれの世界に派遣することにしたんだ」

「それで……その世界から派遣されたのが、あなたのおばあさん？」

「厳密には、ばあちゃんのおばあんくらいじゃないかな。ぼくの場合ね。きみが、目つきが悪いって言ったあの彼の場合は、じいちゃんがそうだったってことになる」

「つまり、あなたのおばあさんのおばあさんと、目つきの悪いビジュアル系さんのおじいさんは、実は異世界からやってきてて、同じくその異世界からやってきた、秩序を乱す人たちを監視する役目を担ってるってこと？」

「そう。正確に言うと、担ってた。過去形。二人とも、もういないから。その役目は、今はぼくたちに移った。その役目を持った人たちは、普通に人間に混じって暮らして、結婚もし、子孫も残す。役目も能力も、子孫たちが受け継ぐ。メンバーが足りなくなると、元の世界から補充される。それは、三百年くらい前から続いてきたらしい」

「あなたたちの一族は、代々その役目を担ってきたんだ」

「うん。ばあちゃんが死んだとき、ばあちゃんの記憶とメッセージが、いっぺんにぼくの頭の中に流れ込んできた。ぼくは倒れて、気を失った。救急車で運ばれて、しばらく入院したよ。結局受験勉強の疲れってことで片付けられたけどね。入院してたから、ばあちゃんの葬式には出られなかった。だけど、形見は受け取った。ばあちゃんかぼくに託したことも、なんとなく理解した」

「自分の役目をあなたに引き継いでほしいってこと？」

彼は、空を見上げながら、うなずく。

「ある日、三人くらい、見知らぬ人たちがぼくに会いにきた。ぼくと同じ役目の人たちだった。きみが目つきが悪いビジュアル系って言った彼も、その中にいたよ。彼らは、役目のこととか、別の世界のことをいろいろ教えてくれたし、そこに何回か連れて行ってくれたりもした」

「行っただ、その世界に」

「でも、ぼくは、こっちの世界のほうが好きだな。向こうは太陽が

きつすぎる。きみが目つきが悪いビジュアル系って言った彼は、直射日光には当たれない。当たると、死んでしまう。外に出ていられるのは、太陽が沈んでいる間と、それから、太陽を遮るバリヤーが張られている、ぼくらの種族が住む都市にいるときだけ。ぼくらは、向こうでは、魔物ってことになって、人間からは恐れられている。夜しか活動できないし、人間にとっては『魔法』にしか見えない特殊能力も使えるから。ちょっと油断すると、光る剣を持った人間たち、ぼくらを狩りにやってくる」

魔物――。

真緒は、あのビジュアル系の、妖しい美形青年を思い出してみる。だから、鳥肌が立ったのかもしれない。

彼は、別の世界での魔物としての気配を、こちらの世界にも投影させているのだ。

「けれど、ぼくは頭が破裂しそうだった。そんなことを突然押し付けられても、パニックになるだけだ。仲間の出現も、向こうの世界での体験も、さらにパニックに輪をかけるだけ。それで、大学入試は全滅だった。勉強どころじゃなかった。だから、もう一度、落ち着いて、受験しようと思った。それが、今、予備校に通って浪人をやってる理由さ」

「いろいろあったんだね。想像つかないけど」

「うん。でも、もう随分、今の状況に慣れたしね。来年は大学に必ず合格するよ」

「じゃあ、ほぼ黒猫さんも、あっちの世界の住人ってこと？」

「そう。向こうでは、十二歳くらいの黒髪の美少年。きみが見たとおり。彼の一族は、向こうでも、非常に危険な部類に入る。だから、特に警戒が必要なわけ。普段と違う動きをちよつとでもしたら、ぼくらはとても気になる」

「それで、私のマンションの前にいたの」

「見知らぬ女子大生の部屋に上がりこんでるなんて、どう考えてもあやしいからね。しかも、料理まで作ったらしいし」

「別に、私に何か悪さをしようなんて、きつと思ってないよ、ほぼ黒猫さんは」

「だから、なんでわかる？」

「だから、なんとなく」

「あいつは、猫と少年以外にも、恐ろしい姿を持っている。甘いよ、人間のお嬢さん」

彼は、眼鏡の奥の淡い紅茶色の目で、真っ直ぐ真緒を見下ろした。その白目は、やはり、空の色を少し薄くしたような、不思議なブル
ー。

真緒は、どきつとする。

彼が話した、見知らぬ異世界の力ケラが、その目の向こうに一瞬垣間見えたような気がした。

つまり、この人は、普通の人間じゃないんだ。
別の世界の血を引いている。

その世界から託された役目も、担っている。

けれども、異質なものを感じるとか、おそろしいとかいう感覚は、彼に対してはそれほどなかった。あのビジュアル系美形の彼は、苦手とはいえ。

「こわくなんかないもんね。ほぼ黒猫さんも、それから、あなたもね」

「あいつと一緒にするなよな。ぼくはこっちの世界の割合が多いけど、あいつは真正正銘、まじりつけなしの向こうの世界の生き物だ」

「警戒しすぎなんじゃないの」

「そのくらいにしないと、役目は務まらない」

「大変だね、あなたも」

「両立させていくさ。でも、ぼくは、もう向こうの世界には行かない。引き継いだ役目はちゃんと果たすけど、こっちでの自分の生活を大切にする。そう決めた」

「じゃあ、その役目とやらで、私に話しかけてきたの。あの猫は危険だって、わざわざ本当のことを言ってる？」

「きみはぼくのことなんか覚えちゃいないだろうけど、ぼくにとってはきみは、大学の入試のときに見かけた、知ってた子だった。嘘はつきたくなかったし、きみに本当のことを話したら、どういう反応が返ってくるのか見たいというのもあった。変な人だと思われるのがオチだと思ったけどね」

「思ったよ、変な人だつて」

「やっぱりね。仕方ないけどさ。本来なら、あの猫を引き取りに行くっていうのは、ぼくの役割じゃない。でも、今回は特別。仲間にも、知り合いだからって、大目に見てもらってる」

「そう。なんかよくわからないけど、ありがとう。私のために役目オーバーしてくれて」

彼が話したのは、明らかに、荒唐無稽な話。

だが、真緒は、半信半疑を通り越し、彼の話を普通に聞いて、相槌を打って、質問も返している。いつも友達と話す雑談のように。ボケとツツコミだつて入れている。

これも、落ち込みすぎていて、危機管理意識が麻痺しているせいなのだろうか。

そのせいも多少はあるかもしれないが、隣の浪人生の雰囲気、きつとそうさせているのだ。真緒は、思う。

最初はあやしい人だと思っていたけれど、彼の素直さは、伝わってくる。

彼が、策略を練ったり、誰かを陥れたりなど出来ない性格だということも、何となくわかる。

「ところで、この後、うちにはば黒猫さんを引き取りに来るつもりなんですよ。どうやってご主人のところに連れていくの？ まさか、抱きかかえてじゃないよね」

真緒は、彼にたずねた。

「そんなことしたら、無事ですむわけがない。猫のキバと爪は、りっぱな凶器なんだよ。何か、ケージとかペット用のキャリーバッグとか、ダンボール箱に入れるかな。あの猫は小柄だから、持ち運びしやすそうだしね。でも、彼がおとなしく、そういうものに入ってくれるかどうかは疑問だけど」

「ほぼ黒猫さんのおうちって、うちのマンションの近く？　猫の行動半径って、そんなに広くないんでしょ」

「うん。歩いて行ける距離だよ。白い、おしゃれな家に、彼は住んでる。その家まで連れ戻せなくても、取りあえず、きみの部屋から出てってくれれば、それでいい。だけど、一応、彼を入れるものは用意しなきゃね。うちは小型犬を飼ってるから、キャリーバッグはある。それを使おうかな」

「犬をいつも入れてるキャリーバッグに、ほぼ黒猫さんを入れるつもり？　やめてあげて。なんてかわいそうなことをっ！」

真緒は、抗議する。

「ちゃんと中は掃除して、消臭スプレーもぶっかけるさ」

彼は、ベンチから立ち上がった。

「そうになると、これからぼくは、うちに帰って、キャリーバッグを取ってこなくちゃ」

「ちなみにあなたのおうちも、うちのマンションの近くなんだ？」

「徒歩では少しきつい。電車で四つ目くらいの駅かな」

彼は、空に向かって手を伸ばし、思いっきり、のびをした。

「ああ、ずっとここに、こうしていたいな。でも、それは無理だ。ぼくが差し当たってやらねばならないことは、既に決まっている。それに、ここは、今は光がいっぱいで、こんなにあたたかくて気持ちいいけど、そのうち太陽も沈んで、気温も下がる。真っ暗になる。いつまでもここにはいられない。ぼくは自分のやることを済ませて、それからまた、こういう天気の日、この時間に、ここに戻ってくる」

彼は、猫のように、いきなりふわりと空に舞った。

真緒が気が付いたとき、彼は、ベンチの上の屋根に乗っかっていた。

「危ないよ、そんなところの上って！」

真緒が叫ぶと、彼は笑って、手をひらひらさせた。

まあ、彼は人間ではないのだから、危なくもないか。

真緒は、思い直す。

なんせ、別の世界では、魔物さんだ。

「見晴らしがいいよ。最高だ。海も見える。あの海の方こうにある国々にも、ぼくは、いつか行く。絶対にね」

彼は、眼鏡をはずした。

眼鏡の縁に光が止まって、端正な横顔のそばで、きらっと光る。

やっぱりこの人、きれいな顔立ちをしている。

真緒は、彼を見上げて、さりげなく確認する。

眼鏡も似合ってるけど、コンタクトにしたほうがいいかも。

彼は、眼鏡を手に握りしめたまま、ぽんと跳ね上がった。

くるくると回転し、ひねりも入れて、コンクリートの地面の上に、見事に着地する。

見とれるくらいの、きれいなフォームだった。

さすが、別世界での魔物さんは、やることが違う。

こういう行動をする彼は、ほぼ黒猫よりも、化け猫っぽい。

「今からでも、水泳の飛び込みの選手とか、トランポリンの選手、目指せるんじゃない？」

真緒は、彼に言ってみる。

「ぼくは、目立つことはしない。あやしまれるからね。この世界で、ごくごく平凡に、幸せに生きていく」

彼は再び、眼鏡をかけた。

「では、ぼくは先に行くよ。日本文学史の源氏物語の授業を見学出来ないのは残念だけど」

「来年、同じのを受ければいいよ。先生が大学をやめない限り、きっと源氏物語の講義は、タイトルは変わったとしても、来年も再来年もあると思う」

「それは楽しみだ。じゃあ、またあとで、きみのマンションで会お

う」

「うん。あとでね」

そして、謎の浪人生は、屋上から姿を消した。

真緒は、屋上から見える景色を眺める。

正面には、ごちゃごちゃした、都市の街並み。さまざまな色が溢れすぎて、灰色っぽくなっている。

背後には、山の重なり。

「海が見えるって言ってたね」

真緒は、ベンチに上った。

屋根は無理だけれど、ベンチの背もたれくらいなら何とか、乗っかれそうだった。

真緒は、ベンチの背もたれの厚みの上に立ち、日除けの柱にしまった。そして、そこから見える風景を見つめる。

街の向こうに、青味がかった銀色のビニールテープのような帯が見えた。海だ。

風景のはるか彼方に、確かに貼り付いている。圧倒的な存在感で。

そうだったんだ。ここからは海が見えたんだ。

小さな感動だった。位置的には、海がその方向にあるというのはわかっていたのだが、実際に見えると、なんとなく嬉しかった。

真緒の学科の建物は、奥まった山側にあるので、海は、どうあがいても見えない。

その屋上も、一度行ってみたことはあったが、エアコンの室外機が並んだ、無機的で殺風景な空間だった。

「いいね、ここ。気に入った」

真緒は、呟く。

建物の中は他の学科専用かもしれないが、屋上は違う。

ここは大学の学生なら、誰が来ても、文句は言われないうらう。

桃華にも教えてあげよう。

桃華のことだから、きっと、ここに入り浸りそうだけれど。

そんでもって、ああいう格好をしているから、ここではちょっとした有名人になりそうだけれど。

真緒は、ベンチの背もたれを蹴って、真っ直ぐ、下のコンクリートの地面に降りる。

あの浪人生のようにはいかなかったが、それでも、きれいに足を揃えて着地できた。

ベンチから降りても、海はやっぱりそこから見えていた。

今まで、気が付かなかったただけなのだ。最初から空との境いにくっついていたのに。

（そろそろ、日本文学史の教室に行こう。まだちょっと早いけど、ここからは、結構移動時間がかかりそうだし……）

真緒は、カバンから携帯電話を取り出し、画面を開けた。

新着メールはなかった。受信履歴を見ようとして、うっかり送信履歴の画面を出してしまう。

そこにずらりと並んでいるのは、全部同じ名前。

真緒の落ち込みの原因の張本人である、彼の名前だった。

十日前から、その一度たりとも返事が来たことはない。

彼の携帯にも、真緒からの受信履歴は残ったはずだが、新しい彼女がいるなら、もちろん、残らず削除されているだろう。

たとえこれから何十回メールを送ったって、電話をかけたって、無視されて終わる送信履歴が、携帯の記録に積もっていくだけ。

彼は真緒からのメールには返事も出さないだろうし、電話にも出ないだろう。

着信拒否をしないのは、彼のやさしさ？

違う。たぶん、そういう度胸というか、潔さがないだけだ。

彼も今の時間は、大学にいる。

彼も大学生で、別の、決して海が見えない低いところにある大学に通っている。

経営学部の学生で、真緒は何度かどういことを勉強しているのか聞いてはみたが、全く理解できなかった。単語自体の意味がわからない。もっとわかるように、努力すればよかったのだろうか。

「おまえは何度言っても、俺の学科の名前さえ、覚えられないんだな」と、言われたこともあったっけ。

私が悪かったの？

料理を作る以外にも、もっともって努力して、彼のやっていることに興味を示し、心を砕かねばならなかったのだろうか？

この一週間、どれだけ繰り返して、そう思ったことがか。
数えられないくらい後悔して、涙を流したことがか。

でも、もうそれも、間もなく終わりだ。終わりにする。

私も、私のやることを済ませて、近いうちに、またここに来る。

あの>別の世界では魔物さんくの浪人生が言っていたように。

そして、今度ここに来るときには、もう落ち込んではいない。

もう少し穏やかで、明るくて、すっきりした気分の私になっている。
る。

真緒は携帯を閉じ、屋上の公園をあとにした。

第6章 逢う魔が時の訪問者

源氏物語の講義では、数枚のプリントが配られた。

そこには、ミミズがのたくった跡に似た、黒い文字が並んでいた。変体仮名の文章。もちろんそれは、源氏物語の一節。

真緒には全く読めないが、その流れるように書かれている文字には、言い知れぬ懐かしさが閉じ込められていた。

先生は、それを現代語に訳し、解説して行く。

自分、その変体仮名のテキストを使った授業が続くらしい。

講義には、真緒の友人たちも何人か、来ていた。

真緒が落ち込んでいることを知らない彼女たちは、無邪気に、「風邪ひいてたの？」とか、「バイトしてたの？」とか、軽く挨拶程度に聞いてきたが、やがてたわいもない雑談に切り替わる。

テレビドラマの話とか、タレントの話とか、お正月の旅行の話とか。彼女たちの話は、尽きない。

真緒は、いつもと同じか同程度に、彼女たちに接することができた、と思う。

それは、ほぼ黒猫が真緒の部屋にきて、彼が作った料理を食べたせいかもしれない。桃華と久しぶりに会って、話が出来たせいかもしれない。それか、あの謎の浪人生と出会って、屋上で話したせいかも。

もしかしたら、その全部が合わさったせいかもしれない。

どれが直接の理由であれ、きのうまでの、部屋に閉じこもっていた自分とは違っていた。

きょう、外に出て、大学に来て、よかった。

真緒は、改めて思った。

大学の友人たちと別れたあと、真緒は家路を急ぐ。

太陽はとうに傾いて、夕方になっている。

真緒を包み込む空気も、冷えてきた。

秋の日暮れは早い。あっという間に、暗くなってしまう。

その、決して待つてくれないスピードで忍び寄る夜の闇は、落ち込んでいるときには、さらにその落ち込みを悪化させる要因。

あたりが急に暗くなると、息が詰まりそうになる。

でも、きょうは違う。

部屋には猫がいるし、あの浪人生も、訪ねてくる。

真緒は、マンションに戻ったが、浪人生はまだ来ていなかった。

ポーチには、誰もいない。

ほぼ黒猫が乗っかっていた誰かのバイクも、もうなくなっていて、今度は自転車が数台、同じところに乱雑にとめてある。

真緒は、二階に上がり、自分の部屋のドアを開けた。

「ただいま」

ドアを開けると同時に、カレーの匂いが部屋の空気から独立して、かぶさってくる。

カレー？

真緒は、キッチンを覗いた。

ガスレンジに、小さめの片手鍋が乗せられている。

蓋を開けてみると、一人分の量のカレーが、中に入っていた。朝の味噌汁以上に、具沢山のカレーだ。

いろんな大きさの材料が、カレールーを被って、鍋の中ごろごろしている。

でも、カレー粉なんて、なかったはずなのに。

真緒は、鍋の蓋を閉め、ほぼ黒猫を探した。

ほぼ黒猫は、相変わらずソファの上に丸まっている。

パソコンのモニターには、やはり、ケーブルテレビの番組が映っていた。

お笑い芸人が、かつらをかぶり、着物をきて喋っている。誰か歴史上の人物になっているらしい。

フローリングの床を見て、真緒は、ぴたりと動くのを止める。

床に散らかしていた雑多なものが、すべて消えていた。いつもの、几帳面な真緒の部屋に戻っている。

「掃除してくれたの？」

けれども真緒は、床にあったものがそのままベッドに移動しているだけであることに気づく。

ベッドカバーの上には、容赦なく、雑多なものたちがごちゃ混ぜになって、うずたかく積み上げられていた。

本も書類も漫画もCDもDVDも服も機械類も、区別なく乗せられている。こうなると、まるで、分別するのをさぼったゴミ置き場だ。

これはもう、確実になんとかしなければならぬ。

今晚、このベッドで寝るためにも。

真緒は、ベッドの上を片付けなくなる衝動を押さえつける。

それは、ここ最近忘れていた衝動でもあった。

よかった。掃除をしようと思う気力というか、馬力というか、それが少し戻ってきている。

「そうだよね。どこに何をしまえばいいかって、いくら化け猫さんでもわかんないよね。取りあえず、ベッドに置いてくれたんだ」

『化け猫』と聞いて、ほぼ黒猫は、ちらりと金色の目で真緒を見た。

>そういうふうに呼ばれるのは、あまり好きじゃないからなくと、その目は主張していた。

「ありがとう、片付けてくれて。もうすぐお客が来るよ。あなたを迎えに。あなたを知ってる人みたい。あなたもその人のこと、知ってるの？」

ほぼ黒猫は、答えない。

朝、真緒が出がけに三個目の猫缶を開けた陶器の皿には、猫缶が入っていたという形跡さえなかった。その内側は猫の舌できれいに舐められ、まるで研磨剤でぴかぴかに磨かれたかのようなだった。

真緒は、窓を開けた。

涼しい風が、ふわっと真緒の横を通り抜ける。

「カレーも作ってくれたんだね。でも、どうやって作ったの？」

真緒はキッチンに戻り、再び鍋の蓋を開け、今度はじっくり中身を観察した。

野菜が入っている。これは、ナスだろうか。それから、ピーマン。枝豆も入っている。

真緒は、冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中は、空っぽだった。気持ちがいいくらいに。

そして、冷蔵庫の上に置いていた、レトルトカレーも消えていた。そうか。これを使って、カレーを作ったんだ。

「見事だ、ほぼ黒猫さん。最後の総仕上げってわけね」

つまり、レトルトカレーの中に、冷蔵庫の残り物を全部入れて、鍋で煮込んだのだ。

カレーの中には、ナス、ピーマン、枝豆の他に、おそらく、りんごやチョコレート、ヨーグルトなんかも入っている。冷蔵庫から、きれいになくなっていくから。

真緒は、カレーを少し舐めてみた。

真緒が苦手とする、レトルトカレー独特の味と食感はしない。

妙に辛くて、でも、変な甘さがあつて、歯ごたえも微妙に生ぬるく、食道につつかえそうな、あの感じ。（メーカーさんには、悪いが）

これだけいろんなものを入れたら、オリジナルは、完全に消去されている。

きっと食べても、胃にはもたれないだろう。

「もしかして、三個の猫缶と引き換えに、食事を三回作ってくれたのかな？　ちょうどぴったり合うよね」

その時、窓の外から、誰かがわめく声が聞こえた。

また、上の階の男子学生だろうか。

時々宴会を開いて、その流れでマンションの前でたむろって、大声で話したりするのだ。

そういうときは、近所からクレームが降り注ぎ、エントランスホールの掲示板に、大家さんの怒りに燃えた張り紙が現れることになる。

だが、真緒は、その声に聞き覚えがあることに、すぐに気づいた。この声は……。

彼だ。あの、謎の浪人生、もとい『別の世界では魔物』さらに『別世界から派遣された監視役』の浪人生！

真緒は、鍋の蓋を閉めて、窓に走った。

ソファに、ほぼ黒猫がいない。

さっきまでそこにあった、丸まった猫の形をした闇色が、掻き消えていた。

何か、いやな予感が、胸のあたりに鈍く渦巻いた。

ベランダの手すりに、ほぼ黒猫がうずくまっていた。長い尻尾がだらりと垂れ、前方を見下ろしている。

よかった。そこにいたんだ。

真緒は、ほっと胸を撫で下ろす。

だが、あの浪人生の叫び声が、ベランダの下から聞こえた。

「おまえ！ トラブルは起こすな！ 普段と違う行動をするんじゃないっ！ ぼくらはそんなにヒマじゃないんだからなっ！」

真緒は、下を覗いた。

あの浪人生が立っていて、ベランダのほぼ黒猫を真っ直ぐ見上げ

ていた。

片手に、バスケットをさげている。

バスケットは籐製で、魚と猫の顔のアプリケがくっついていた。CATというアルファベットのアプリケの文字も見える。どう見ても、猫用のキャリーバッグだ。

真緒が抗議したので、猫用のを探して持ってきたのかもしれない。

「その部屋からとっと出て行け！ おまえ、何を企んでいるんだ！？」

浪人生は叫んだが、ほぼ黒猫は、のんびりとうずくまり、リズムをつけて、尻尾をぱたぱたと左右に揺らしている。

もしかして、楽しんでる？

真緒からは、ほぼ黒猫の後頭部しか見えなかったが、前に回って見てみたら、その顔は、浪人生を見下ろしながら、チェシヤ猫のように、薄ら笑いを浮かべているのかもしれない。何せ化け猫なのだから、あり得ないことではない。

マンションの前を通りかかった人々が、猫に向かって叫んでいる浪人生を思いきり迂回して、何度も振り返りながら、あるいは、かわり合いにならぬよう完全に無視して、小走りで去って行く。

彼は、さつき屋上の広場で、目立つことはしないなんて言っていたけれども、十分目立っているし、あやしすぎる。

「あのさー」

真緒は、浪人生に向かって、話しかけた。

「上がって来たら？ そんなところで猫と話してたら、ものすごく人目につくと思うけど。今の時間帯って、割と人が通るよ。みんな、会社や学校から帰ってくる時間なもの」

「あ、ああ。そうだね」

浪人生は、真緒に視線を移した。そこに真緒がいたことに、初めて気づいたようだった。

「202号室だから」

「うん」

浪人生は、ベランダの下に消える。

「ほぼ黒猫さん、中に入らない？」

真緒は、ほぼ黒猫の頭にそつと手を置いた。

ほぼ黒猫は、>了解くという返事の代わりに、真緒のてのひらに、すり、と頬を軽くこすりつけた。

浪人生が真緒のマンションのエントランスホールに消えたあと、どこからともなく、一人の若者が現れ、ポーチのブロック塀にもたれかかった。

真緒が『目つきの悪いビジュアル系』と呼んだ、あの青年だった。

彼は軽く腕を組み、目を閉じて動かない。

逢う魔が時の青味がかった景色の中で、闇色のコートに身を包んで立つ彼は、やはり、見る人をどこか不安にさせる要素を確実に持

っていた。

マンションの前の道路を、一人の少女が、ゆっくりと歩いてくる。制服を着た高校生だった。

その制服は、紺色のセーラー服。襟全体が白で、縁に紺の線がぐるりと入っている。

襟の角には、星のマーク。胸元にはアルファベットの刺繍。

レトロなデザインの制服ではあったが、少女は、今風の垢抜けた着こなしをしている。

艶のある肩までの黒髪と、黒い目。

どこかエキゾチックな雰囲気を持ったその少女は、マンションへと進路を変え、黒衣の青年の横を通りかかる。

「来ましたね」

青年が言って、目を開けた。

少女は立ち止まり、彼を眺める。

黒衣の青年は、その場で腰を落とし、手を前に重ね、少女に向かって頭を下げた。

まるで、その少女がとんでもなく身分の高い人物で、彼がその従順な臣下であるかのように。

丁寧で、そして、とても優雅な美しい動作だった。

少女は、彼のその行動が当たり前前であるかのように、動じることなく、彼を見つめた。

そういう挨拶をされることに、慣れているようだった。

「ごきげんよう、見張り人グループの警告係さん。うちの猫が、あなたがたの手をわずらわせるようなことを何かしましたか？」

少女がたずねた。

「いえ。今のところ、殊更には。ただ我々は、あなたのペットの行動に、少し敏感なだけですよ」

彼は答えて、にっこりと笑う。礼儀をわきまえた、控えめで上品な微笑みだった。

「あなたの猫は、二階です」

「ありがとう。ご苦労様」

少女も、エレガントであどけない微笑を返し、そのままマンションのホールへ入っていく。

第7章 謎の女子高生（飼い主登場）

真緒は、ドアを開けた。

浪人生が、少し緊張した面持ちで、そこに立っていた。

「そのバスケット、どうしたの？ 猫用のでしょ？」

「ああ、これ」

彼は、籐のバスケットを掲げてみせた。

デフォルメされた黒猫の顔とおさかなのアプリケが、変にかわいい。

「犬用のキャリーバッグを持って家を出ようとしたら、おふくろに質問されてね。知り合いの猫を入れるって言ったら、ちょっと待ちなさいって、これを出してくれた。やっぱり犬用のに入れようとしたのは、ヒンシュクだったみたいだね」

「当たり前でしょ。犬さんも大迷惑だろうしね。あなたの家には、猫もいるの？」

「ばあちゃんが飼ってた猫だよ。その猫も、ばあちゃんが死んだあと、いなくなった。もうかなりの高齢だったから、死に場所探しに行ったって、みんな言う」

「あなたの家族って、おばあさんとあなたが普通の人間じゃないって……」

「知るわけがない」

彼は、肩をすくめた。

「ぼくだって、ばあちゃんが死ぬまで、知らなかった。わざわざ言う必要もないことだしね」

「それもそうだね。……どうぞ」

真緒はドアを開けたまま彼に言ったが、彼はそこに突っ立っていた。明らかに、ためらっている。

「入らないの？」

「その……」

彼は、口ごもる。

「なに？」

「一人暮らしの女性の部屋って、入ったことないから」

真緒は、吹き出しそうになる。

「お仕事でしょ。別の世界の魔物さん。照れないの」

真緒は、服の上から彼の腕を軽くつかんだ。

その手は、つい最近まで真緒の部屋に来ていたあの彼氏より華奢な手だったが、しっかりした存在感があった。

「最近掃除をさぼってたから、ほんとに汚かったんだけど、帰って

みたら、ほぼ黒猫さんがきれいにしてくれてたの」

「あの猫は、きみんちの家政婦か？」

彼が、あきれたように言う。

「あ、でも、ベッドの上は見ないでよね。床に散らかしてたものが、全部ベッドの上に行っちゃってるから」

「ベッド？」

「今、一瞬、変なこと考えたでしょ」

「か、考えてないっ！」

彼が、玄関で靴を脱ぎながら、顔を赤くして叫んだ。

「冗談よ、冗談」

真緒は、笑う。

「カレーの匂いがする」

真緒の部屋に入った浪人生が、呟いた。

「ほぼ黒猫さんが、今度はカレーを作ってくれたの」

「オーソドックスでポピュラーなメニューを選んだな」

彼が、自分の部屋にいる。

それは、なんとなく変な感じだった。

やはりそれは、見慣れたもので構成されている真緒の部屋に、見慣れていない彼が突っ立っているせいなのだろう。

ベランダからソファに戻ったほぼ黒猫は、古代エジプトの猫神の彫像を思わせるような、きっちりしたポーズをして、彼を見つめていた。

目が、必要以上にキラキラ光っている。

「小旅行は、もうおしまいだ。この中に入れ。おまえの家まで送ってやるよ。それが、自分で勝手に帰るか？」

浪人生が、バスケットを開けて床に置くと、ほぼ黒猫は、ちらつとそれを見た。そして、大きな欠伸をする。口の中の、とがったキバと歯が見えた。

「なんか、完全になめられてるような気がするんだけど」

「ぼくはまだ新人だから、仕方がない。やつは、何百年も生きている。こつちの世界で過ごした年月も、ぼくの今までの人生よりも長いだろうしね」

ほぼ黒猫は、尻尾をくねらせながら、ソファの背もたれの上に移動した。

そしてそこから、真緒の肩の上に飛び乗る。
あつという間だった。

何か風がきたと思ったら、ほぼ黒猫が肩に乗っていた。
あたたかくて、くすぐつたい。
それほど重くはなかった。

「おまえは、鳥か？」

彼は、それこそ黒い梟のように真緒の肩に止まっているほぼ黒猫に向かって、突っ込みを入れる。

「ほぼ黒猫さん。名残惜しいけど、きみはもう、帰ったほうがいいよ。きみがここから出ていかなきゃ、この彼も、家に帰れない。彼は受験生だから、帰って勉強させてあげなきゃいけないよ」

真緒が言つと、>ふうーん？<という感じで、ほぼ黒猫は、浪人生を眺める。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「誰か来た」

真緒は、猫を肩に乗せたまま、呟く。

平日のこういう時間に、いきなり誰か知っている人が来ることは、ありえない。

友達なら、メールにしろ電話にしろ連絡があるはずだし、光熱費の支払いなんかも、全部引き落としにしているから、集金の人が来ることもない。

となると、宅配便とか、新聞の勧誘とかだろうか。

「ああ、ぼくが開けるよ」

猫を肩に乗せたままでは無理だと判断したのか、浪人生は、さつと玄関に移動して、ドアを開けてくれた。

「こんばんは」

ドアの向こうから、一人の少女が現れる。見知らぬ女子高生だった。

肩ぐらいまでの真っ直ぐな髪。少し釣り目がちの、黒曜石のような目。ルージュはまだひいていないに違いないのに、どこか艶めいて見える薄紅の唇。

そして彼女が着ているのは、襟が白い、紺色のレトロっぽいセーラー服だった。

真緒が今年の三月まで着ていた制服だ。知りすぎるほどによく知っている制服。

襟の後ろには懐かしい星マークがある。スカーフも、何百回結んだことだろう。

制服のなじみ具合からすると、二年生ぐらいだろうか。

彼女は、ドアを開けた浪人生を見上げた。そして、微笑む。

「あらら。見張り人グループの記録係さんじゃない。あなたもいたんだ」

浪人生は、真一文字に口を引き結んだ。

その美少女の白目もまた、心配になるくらい、青味がかっていた。心配を通り越して、不気味さを感じさせる一歩手前の、それほどの青だ。

彼女は、真緒に視線を移動させる。

ほぼ黒猫が、真緒の肩の上で、にゃーと鳴いた。

真緒は、初めて、彼の鳴き声を聞いた。

「うちの猫が、すっかりお邪魔してしまったようですね」

少女が言った。

「あなたは、この猫の飼い主？」

真緒がたずねると、少女は、頷く。

「手間が省けた。彼女に連れて帰ってもらおう」

浪人生が言う。

「ロビーディアンゲルズリリスベットティエルアंकピエレル」

女子高生は、呪文のような言葉を呟いた。

すると、ほぼ黒猫は返事をするように鳴いて、真緒の肩を蹴り、女子高生の肩に飛び移る。

真緒の肩は軽くなった。けれどもその代わりに、なんともいえぬ寂しさが、ごく軽いかぶさってきた。

踏み台にされて蹴られたあたりも、ずきつと痛かった。

「その長いのが、この猫さんの名前？」

真緒が訊くと、ほぼ黒猫、もといロビー何とかか何とかが、真緒をちろつと見る。

>じゅげむか！　なんて突っ込むんじゃないぞくと、その目は言っていた。

「いつもは省略して、単に『ロビン』って呼んでいますよ。うちの父

は、『ナチグロ』って呼んでるけど」

女子高生が言った。

「その猫、もう二度と他の人の家に入り込まないように、ちゃんと管理しとけよ」

浪人生が、女子高生に言う。

「パソコン使ったり、料理作ったり、度を越している」

「へえ。パソコン使って、料理を作ったんだ」

彼女は、意外そうに、肩に乗っかっている飼い猫を眺めた。

「うちでは、おおっぴらにそういうこと、出来ないもんね」

「だからといって、誰かの家でさせるな」

浪人生が言うと、彼女は、少し眉をひそめる。

「さつきから、横柄な口のきき方しているけど。わたしにそういう態度取っていいの、記録係？」

真緒の体の表面に、鳥肌が、ざわっと立つ。

この子、何者？

やっぱり、別の世界とかかわりがある人物なんだろうけど。それにしても、この圧倒的な威圧感は……。

目つきの悪いビジュアル系青年ほどの、不安を感じるようなあやしさは持つてはいないが、それでも彼女には、その場の空気を総毛立たせるような何かがある。

「もし向こうに行くことがあつて、たまたまあなたに会ったら、いくらでも挨拶してやるよ。ひざまずいて、頭をさげて、うやうやしく、丁寧に。だけど、この世界では、あなたはただの女子高生だ。ぼくよりも年下だしね。だからそういう前提であなたと接する」

浪人生が、臆することなく、彼女に言った。

「あなたの仲間の警告係さんは、ちゃんと正式な挨拶をしてくれたけど？」

「彼は、頻繁に向こうとこちらを行き来して、向こうの世界でも暮らしている。でも、ぼくは、向こうへは行かない。ぼくの世界はここなんだから」

「あなたは、こちらを選ぶってわけだね」

「あんたも、もうすぐ受験だろ。二つの世界の現実に悩むといいさ」

「いやなこと言うね、記録係。それでなくても、単位落としそうなの」

少女は、肩をすくめた。彼女の肩に止まったほぼ黒猫が、それに合わせて上下する。

K学院に通ってるなら、勉強、大変だろうな。
彼女と同じ高校にいた真緒は、彼女をちょっと気の毒に思う。

真緒も、それなりに苦労した。単位を落とすところまではいかなかったが。

彼女は真緒の感想を見抜いたように、真緒を真っ直ぐ見た。

「きみの高校の先輩だ。現役でS大に合格した、優秀な女子大生」

浪人生が言う。

突然ふられて、真緒は、あせる。

そ、そこまで言わなくても。

「じゃあ、家庭教師、してもらおうかな。格安料金にしてくれるなら」

少女が、真緒に笑いかける。

そう言ったのが、本気なのか冗談なのか、真緒にはわからなかった。

「彼女、あなたの正体を知ってるんだね。でも、そういう人もいたほうがいいかもしれないね」

女子高生が呟く。

「この猫さんが、私に料理を作ってくれた理由って何なのかしら？
この部屋に来た理由は？」

真緒は、女子高生にたずねてみた。

彼女ならわかるだろうか。飼い主なんだし。

女子高生は、しばらく考えたあと、答える。

「んー、わかりません。でも、たぶん、たいした理由ではないと

「思いますよ」

「たいした理由じゃない？」

「だって、猫だもの。向こうではともかく、こちらでは、ただの猫なんです」

少女が言って、いたずらっぽく微笑む。

「猫がじゃれるのに、たいした理由はない。じゃれたいから、じゃれる。動きを目で追ってて、我慢できなくなったから、じゃれる」

浪人生が、解説するように言った。

「たぶん、そういうことでしょう。それじゃ、わたしたちは、これで。お邪魔しました」

女子高生は、その年代の女の子たちがよくやるような感じで、ペコりと頭を下げた。

肩に止まったほぼ黒猫も、頭を下げる格好になる。

「あ。待つて」

真緒は、ほぼ黒猫の前足をそとつかんだ。

ほぼ黒猫は、前足を引っ込めることなく、真緒におとなしくつかまれていた。

> 最後だから、握手くらいはしてやるよと、そのやわらかい肉球は言っていた。

「ありがとう。あなたのおかげで、元気が出た。料理も、おいしか

った。あのメニュー、私も作るね。ケーブルテレビの番組も、見てみるよ」

ほぼ黒猫は、黙って透明な金色の目で真緒を眺めていたが、その目からは、何の表情も読み取れなかった。やはり、猫なのだから、仕方がないのかもしれない。

真緒は、ほぼ黒猫に手を回して、彼の体をぎゅうっと抱いた。それは、たぶん、その女子高生を抱きしめて、耳元でささやくように見える体勢になってしまった。

現に、浪人生は、ぎよっとして、目の前の真緒と女子高生とほぼ黒猫を交互に見比べる。

「さよなら、ほぼ黒猫さん」

「ごきげんよう、先輩。それから、記録係さんも」

女子高生は、手を広げ、ステップを踏むように、二人に挨拶をした。

それは、涼しげで優美な仕草だった。

それからほぼ黒猫を肩に乗せたまま、女子高生は、真緒の部屋から出て行った。

ドアの閉まる音が、妙に物悲しく、長く間延びして響いた。

「結局、これ、使わなくてすんだな」

浪人生がつぶやいて、籐のバスケットの蓋を閉める。

「ご主人様登場とは、正直、びっくりしたけど」

「あの子、何者？」

「彼女も、半分は向こうの世界の住人。半分は、こちら側」

「彼女、向こうでは、お姫さま？ ひざまずいて挨拶って……。それとも、あなたの上司とか？」

「姫君には、違いない。上司でもあるかもね。でも、もっとやっかない存在だ」

浪人生は、軽くため息をつく。

「もしかして、あなたが入試のときに私を覚えていたのは、私が彼女と同じ高校の制服だったから？」

「偶然だよ。そりゃあ、うわー、同じ制服だって、最初に思ったのは事実だけだね。それ以上の意味はない。でも、あのセーラー服は、やっぱり、かわいいな」

「記録係って……。それがあなたの役目？」

「うん。あいにくぼくには、事務所もないし、コンピューターもないからね。この世界に入ってきたり、行き来しているものたちの膨大で詳細なデータは、全部ぼくの頭の中。それを保存して、仲間に提供するのがぼくの役割。ばあちゃんから引き継いだ能力だ」

「それは……受験生にはつらい仕事だね。じゃあ、あの目つきの悪いビジュアル系さんは？」

「彼は、警告係。他にも、探知係とか仕置係、始末係なんかもいる」

「ネーミングからして、おっそろしいグループ」

「古いテレビ番組の見すぎだつて。仕置係と始末係が出てこなきゃならないほどの騒動は、そう頻繁には起こらないよ」

浪人生は、バスケットを抱えた。

「ぼくも、帰る。きょうはなんだかんだで予備校はさぼっちゃったけど、でも、面白い一日だった」

「うん。私も」

真緒は、答えながら、ますます寂しさを感じる。

そう。彼の役目も、終わったのだ。ほぼ黒猫がこの部屋から出て行ったのだから。

彼も、戻る。自分の生活に。

そして、真緒も、戻らねばならない。いつもの日常に。

「きみは、これから晩ご飯かな。あの猫が作ったカレーで」

「その前に、私は、公衆電話を探さなきゃ」

「公衆電話？　きみ、ケータイは……」

「もちろん、持ってるよ。でも、公衆電話があるの」

「よかった。ケータイは、持ってるんだ」

浪人生は、安心したように、つぶやいた。

「でも、公衆電話なら、このマンションにあるよ」

「え？」

「一階のエントランスホールの隅っこにさ。知らなかったの？」

「あ。そうか。そういえば、あつたんだ。あのへんに」

浪人生は、声を出して、笑った。
声のトーンも、笑い方も、そして、笑顔も。全部、感じがよかった。

「きみも、結構、何かと損してる性格なのかもしれないね。まあ、
ぼくも、人のこと言えないけどね」

「私も、そう思う」

「では、来年の春、大学で会おう、先輩」

彼は、手を差し出す。

真緒は、素直に彼の手を握った。

少し冷えた、でも、真緒よりも大きい、男の子の手。
しっかりと真緒の手を包み込む。

ほぼ黒猫とは、お互いの手の構造上の問題で、正式に握手は出来
なかったけど、彼とはちゃんと出来た。

そして、彼もまた、ほぼ黒猫と女子高生に引き続き、真緒の部屋

からいなくなった。

真緒の部屋が、急に静かになる。
部屋の中が、がらんと広くなり、照明もやけに明るくなった。
たくさんの、素敵な魔物たちが突然やってきて、あっという間に
通り過ぎて行った。一瞬の夢のように。

「……感傷にひたってる場合じゃない」

真緒は、携帯電話を握りしめた。

「ひとつ終わらせなければ、ひとつ前には進めない。私が今の状況
から脱出して、次の扉を開けるために、あなたにも、無理やりにも、
協力してもらおうからね」

真緒は画面を開け、送信履歴に永遠のように出てくる同じ名前を
にらみつけた。

第8章 ほぼ黒猫のおうち

「でも、あなたにしては、珍しいね。他の人の家に入り込むなんてそれとも、そういうことって、しょっちゅうやってたりして？」

女子高生は、肩の上に丸くなって乗っかっている飼猫に向かって、話しかけた。

すれ違った親子連れの母親が、にっこり笑って、「ほら」と彼を指差し、子供が目を輝かせて、「ネコちゃん、かわいいーっ」と叫ぶ。

「あの人のことに興味があったの？ 可愛い人だったものね。でも、興味があったのは、あの人が持つてる、別のことだったのかな？」

お見通しってわけか。

彼は、肩の上で、バランスを取る。

あまり爪を立ててつかまって、制服を汚したり傷つけたりしたら、当然、怒られる。

彼女をとことん怒らせたら、目が真っ黒になって、髪が逆立って、おっかないったらないのだ。

彼女の読みは、当たっていた。

すなわち、彼が真緒の部屋に上がりこんだのは、たいした理由がないということ。

確かに、たいした理由ではなかった。言わば、なんとなく、だ。

料理を作ったことも、またしかり。取り立てて、深い理由はない。

同居している家族がお笑いが好きなこともあって、常にそういう賑やかな番組は、居間のテレビに映っていた。お笑い番組に次いでワイドショー、料理番組がベスト3だろう。

そういう番組を長い間見ているうちに、彼がなんとなく気に入った新人のお笑い芸人は、数年後、必ずブレイクすることに気が付いた。

そのことがおもしろくなり、新人の芸人が登場すると、必ずチェックを入れるようになった。ゲームのような感覚と、ノリだった。

そして、ケーブルテレビの番組には、彼が今いちばん気になっている新人が、たくさん登場するのだ。

それも、一日に何回も同じ番組が放送されている。何度も繰り返して、彼らを見ることが出来る。

あのマンションが、ケーブルテレビ付きだということは、知っていた。

以前、通ったとき、住人の学生たちが、ケーブルテレビのことを話していたからだ。

いつか、どこかの部屋に入り込んで、見られればいいな、くらいに思っていた。

それで、たまに、すわり心地のいいバイクなんかの前に止まっていたときなんか、そういうごく淡い期待を抱きながら、シートの上で日向ぼっこをしたりしていた。

そこに登場したのが、あのマオとかいう女子大生だった。

彼女は、撫で方も、とても上手だった。

撫でてほしいと思っっているその場所を、撫でてほしいと思っっている強さで撫でてくれた。

猫好きで、人もよさそうだったし。

チャンスだと思った。

それで、部屋にお邪魔することにしたのだ。

別に彼女が失恋で落ち込んでいようと、関係はなかった。部屋が汚くても、気にしなかった。

ただ、やっぱり周囲に雑多なものが散らばっているのが目に付いて、テレビに集中できなかったので、取りあえず、床にあったものは全部、ベッドの上に移しておいたけれど。

彼女は、大好きな猫缶も、わざわざ買ってきてくれた。（あれは、彼の家ではあまり出してくれない、高級食品なのだ。）

座り心地のいいソファもあり、ゆったりと大好きな番組が見られる。最高だった。

パソコンの使い方は、テレビの教育番組から覚えた。わかりやすい本も、あふれるくらい家にあった。

会社の第一線でパソコンを使うサラリーマンが家族にいたので、そういう資料には事欠かない。書斎にあるパソコンも、家に誰もいないとき、こっそり操作をしている。

実は、パソコンだけでなく、携帯電話だって、オーディオ機器だって、洗濯乾燥機だって、家にある機械類の操作は、ほとんどマスターしている。

なんせ、家にずっといるとヒマなのだから。故郷である向こうの世界だって、そう頻繁に行けるわけではないのだ。

料理を作ったのも、単に、試してみたかっただけだった。

> 冷蔵庫の残り物を使って、料理を作る<

それは、テレビでも雑誌の見出しでもよく目にする、ちょっと魅力的で、気になるコピー。

けれども、家では、そういうことは出来なかった。彼と同居している主婦は、料理が趣味で、冷蔵庫の中は、常にいろんな食材でいっぱいなのだ。

何をどれくらい入れておくかは、決まっているようだった。だから、その量以下になることはありえない。

なくなれば追加されるどころか、なくなる随分前に、もう既に別のところにストックされ、冷蔵庫に入れられる日を待っている。

あの女子大生が猫缶を買いに出たとき、冷蔵庫を開けてみると、いい具合に食材が残っていた。メニューも、簡単に出来るものが、ぱぱっと浮かんだ。で、作ってみただけだ。

おにぎりを失敗したのは不覚だったが、他のものは、だいたいうまく出来た。

別に、彼女を慰めようとか、元気づけようとかは、微塵も思わなかった。

ただ単に、なんとなく作りたかっただけ。

そりゃあ、おいしいとか、ありがとうと言われて、悪い気はしなかったし、彼女が料理を食べて少し元気を出してくれたことが、多少は嬉しかったのだけれど。

人間に親切にしてやろうなんて、たぶん、生まれてこのかた、思ったことなどありはしない。断言できる。

全く、人間たちは、勝手だ。

そのへんになんとなくうずくまっているだけで、それを見て、癒される、などと言う。

そこにいるだけで、心が和むとも。

ちよつと手を舐めてみたら、やさしいんだね、と言う。

単に頬がむずがゆくて、すりすりしたりすると、慰めてくれるの

？ などという、予想外の言葉が降ってくる。

そんなつもりなど、毛頭ない。

自分のやりたいことを普通にやっているだけなのだ。

人間たちは、それを勝手に都合のいいように、解釈する。

まったくもって、おめでたい連中だ。

ただ、こちらの世界で猫になっていると、そういった猫好きの人間たちからちやほやされ、すこぶる暮らしやすいというのは、確かにあるのだけれど。

「あなたは外見によらず、あつたかくて世話焼きなところがあるものね。そのへんにも、彼女の家に上がり込んだ理由があるのかな。でも、あまり、あの見張り人グループの人たちを刺激しないようにね。あなたがいつもとちよつと違うことしただけで、飛んでくるんだから」

彼の主人であるところの、女子高生が言った。

見張り人グループの、先代の記録係とは、うまく付き合っていた。出会ったときには、もう老人だったが、やさしくて、猫好きで、猫の撫で方も、あの女子大生のように、上手だった。

彼女は、白い猫も、飼っていた。

白い猫は、彼が訪問すると、頼みもしないのに、ざらざらした舌で、彼を舐めてくれた。

昔、この猫が生んだ子猫に、あんたは似ているよ、と、記録係は

笑っていた。

その記録係も白い猫も、今はもう、いない。

新しい記録係は、先代の孫だという、男子高校生だった。

精神的な余裕がなかったから、近づかなかった。

けれども、そろそろ仲良くしてやってもいいかな、と思う。

彼に近づけば、あのマオとかいう、猫みたいな名前の女子大生も、もれなくくつついてきそうだし。

そうすると、また彼女に撫でてもらえるし、『紀州のとれとれマグロー・ムース仕立て』も買ってくれる。

なにしろ、好きなときにケーブルテレビが見られるのだ。気が向いたら料理を作ってもいいし。

新しい記録係とは、お互い第一印象はよくないが、それはそれでいい。

おちよくりがいもありそうだ。

ああいう性格は、ほどほどにおちよくると、おもしろいのだ。

春になって、彼の浪人生活が終わったら、また姿を現してやろう。

彼は、ひそかに決心した。

やがて、女子高生と彼の前に、ガラスが印象的な、白い家が現れる。

塀からは、いろんな種類のハーブがあふれていた。

ローズマリーに、ラベンダー、セージ、ミント、オリーブ。彼が大好きなキャットニップも、たくさん植えられている。

彼は鼻をひくつかせ、風の中に混じる、彼の家の香りをかいでみる。

「おうちに帰ってきたよ」

彼女が言った。

彼は、にゃー、と甘えた声を出してみた。

第9章 真緒の終わらせ方

真緒は、携帯を握りしめ、公衆電話の前に立った。

マンションのエントランスホールの隅。

少し奥まったところ、それを設置するためにつくられたとおぼしき、浅くへこんだスペースに、その電話はあった。

バツタ色の、のっぺりした四角い公衆電話。

毎日、そばを通っているのに、そこに存在することさえ、知らなかった。

見えていたのかもしれないが、見ていなかった。使う必要がないものだから。

そういえば、真緒がここに引越してきたとき、大家さんが言っていた。やっぱり公衆電話は、大きな災害が起こったときなんかには、頼りになるからなって。

公衆電話を使うのなんて、どれくらいぶりだろう。

最後に使ったのは、たぶん、小学生の時だ。

真緒は、携帯の画面を開け、アドレス帳を表示する。

彼の名前、電話番号、メールアドレス、住所。

登録しているので、電話番号を覚える必要もなかった。

番号をいちいち押して電話をかけるのは、初めてだ。そして、最後にもなるだろう。

真緒は、思い出したのだ。

彼の母は、携帯電話を持っていない。

今時、めずらしいよね、と彼は言っていた。機械に滅法弱くて、テレビ番組の録画も出来ないし、食洗機も満足には使えないらしい。

だから、彼に用事があるときは、自宅の電話か、公衆電話を使う。それなら、彼は、公衆電話からかかってきた電話には出るだろう。彼の友人知人で、公衆電話からかける人は、まずいない。母親以外は考えられないに違いない。

それで真緒は、公衆電話を使うことにした。彼は、真緒の携帯からの電話には決して出ないからだ。

少し卑怯なやり方かもしれないが、それはお互いさまというもの。彼だって、卑怯な別れ方をしようとしているのだから。とにかく、彼と話をしなければならぬのだ。

真緒は、百円玉を細長い隙間に落とした。

硬貨は電話の中に吸い込まれ、受話器から、携帯よりもはるかに大きくてクリアな、途切れることのない無機質な発信音が聞こえる。

真緒は、携帯のアドレス帳を見ながら、ゆっくりとボタンを押した。

発信音は、コオロギの鳴き声に似た、揺れるような音に変化した。

呼び出している。

彼は、出るだろうか？

音が消える。

真緒は、ぎゅっと携帯を握りしめる。

息が止まりそうだった。

「もしもし？」

彼の声だった。

懐かしい、低い声。

ずっと、ずっと、この声が聞きたかった。

「もしもし」と、真緒も言う。

しばしの沈黙。

そりゃあ、驚くだろう。母親からの電話からだと思って出てみたら、別れたつもりの元カノだったのだから。

「元気？」

真緒は、出来るだけ明るく、言った。

「うん……」と、彼が答える。

戸惑っている。

バツが悪いというか。

今さら何の用だ、というニュアンスも混じっている。

だけど、負けない。

絶対、気後れなんかしない。

真緒は、短い時間で、呼吸を整える。

「新しい彼女とは、うまくいってる？」

真緒は、たずねた。

その質問をすると、いったいどういう返事がかえってくるのか。

それが知りたかった。

「あんまり。最初思ってたのとは、少し、違うかな。もうすぐ別れるかもしれない」

それが、彼の答え。

真緒に対して、悪びれる様子もない。

携帯で話す彼の声のほうが、もう少しマイルドで、やさしかった。公衆電話の彼の声は、なんだかキンキンしていて、耳障りだった。

そして、情報は、それで十分だった。

つまり、やっぱり彼には新しい彼女が出来ていて、真緒とは別れていたのだ。

電話もメールも拒否されたのは、そういうこと。

わかつてはいたけれど、ショックはある。

しかも、もうすぐ別れるって？ 新しい彼女と？

別れるって……そう言った？

「久々に、真緒の作った料理、また食べたいな」

彼が、電話の向こうで呟いた。

無邪気な子供のよう。真緒がよく知っている、いつものあの調子で。

それは、ほんの刹那の、甘い誘惑。

とろけそうな、お菓子のような。

これでもかというくらい砂糖とクリームとバターを入れて作った、カロリーの高い、でもおいしそうなケーキのような。

傷ついた心が、震える。

そして、無理やり押さえつけないと、暴れ回りそうになる。

真緒は、一瞬、迷った。

もし、OKしたら？

たぶん、この週末にでも、あの時間が戻ってくる。

真緒がキッチンで料理を作り、彼がソファでなごむという、あの

パターン。

あの穏やかで楽しい、素敵な時間が、また返ってくる。

それは、真緒が落ち込んでいたこのつらい期間、いちばん欲しかったものだっただ。

それが二度と戻ってこないことが悲しくて、寂しくて、せつなくて泣き暮らした。

ちよつと勇気を出すだけで、それがまた戻ってくる。軽く、首を縦にふるだけで。

彼に「うん、いいよ」と短く返事するだけで。

けれど――。

厳密には、そうはならないだろう。

もし彼とよりを戻して、またあの時間を手に入れることができたとしても、それは一時的なもの。

彼は再び新しい彼女を求め、真緒はまた、泣くことになるだろう。遅かれ早かれ、そういうことになる。

そして、一度OKしてしまえば、それが何度も何度も繰り返されるはめになることも。

桃華に忠告されなくても、今はそれがわかりすぎるほどに、わかる。

たぶん、そういう人なのだから。

例えば、前に読んだ本の中身と結末が、もう既にわかってしまっているように。

同じ本は何度読んでも、変わることは決してないのだ。本の同じところで突き出た同じトゲで、同じように、また怪我をしてしまう。もう自分は、その本を選んではいらない。

手に取るなら、まだ読んでいない新しい本にしなければ。

私にも、プライドはある。

それは、もちろん、流されて薄っぺらなものにはいけないし、私が私であるためにも、守らなくてはならない。

決断するのに、そう時間はかからなかった。

たぶん、一秒もかかっていなかったかもしれない。

真緒は、彼に言った。

「私はもう、あなたに料理は作れない」

「……そうか。残念だね」

彼が電話の向こうで言った。本当に、残念そうに。

「うん。とても残念だ」

真緒も復唱する。礼儀的に。

「それじゃね」と、彼。

「うん。じゃあね。いろいろ、ありがとう。楽しかったよ」

「ぼくも楽しかった。ありがとう」

そう。自分は、ずっとこの言葉を聞きたかったのだ。

きちんとした別れの言葉。

別れるときには、やっぱり別れの言葉をちゃんと伝えてくれないと、わからないよ。

方向を見失ってしまふ。

心の行き場が、なくなってしまう。

行き場がなくなった心は、ぐるぐる回って、みんなに心配かけて、長い長い時間に癒してもらって、いつか、やんわりと昇天させるしかない。

本当は、彼には、言いたいことは山ほどあった。

泣き叫んで、文句を言って、彼を責めて……。

そついうのを修羅場っていうのだろうか。

電話だから、そうひどくはならないと思うけど。

でも、そついうのは、やめる。

彼がひくことは目に見えているし、自分が惨めになる。

スマートに、オトナとして、お別れする。

「さよなら」

真緒は、受話器を置いた。

それは、彼が電話を切るよりも、たぶん、とても早かったと思う。きつと彼は、真緒が電話を切ったそっけない濁音と、その後に永遠のように続く無機的な連続音をまともに聞いてしまったに違いはない。

真緒が彼に対して行った、小さな小さな、最後の意地悪だった。

真緒は、深く呼吸をする。

息を吐くと同時に、体の内部にずっとこびりついていて、目に見えない涙の固まりが、一つ残らず全部抜け出て行ったような気がした。

でも……。

もしかして、結局、思いがけなくも、だけど。

結果としては、私が彼を振ったことになるのかな？

すっかり闇に染まった外の冷たい空気が、ホールに流れ込んでくる。

真緒は冷えた携帯電話を握りしめ、両手で肩を抱いて、階段を上がった。

第10章 a recovery

床がきれいに掃除された真緒の部屋は、やはりどこか殺風景だった。

それは、束の間の訪問者たちがやってきて出て行った、その名残りの寂しさのようなものもあるのかもしれない。

ベッドの上は、目を覆いたくなるほど、ごちゃごちゃだった。

ベッドは、寝るまでに、片付けなければならない。

その前に、晩ご飯にしよう。

ほぼ黒猫が作ってくれたカレーがあるから、ご飯を炊いて。

真緒は、ほぼ黒猫が座っていたソファを見る。

ほぼ黒猫がいたあたりは、毛だらけだった。

おまけに、背もたれには、爪の跡が入っている。

深いのが三本と、数え切れないのが、いっぱい。

ここで、爪とぎをしたらしい。

「あの猫おお……」

真緒は、ため息をつく。

でも、猫を部屋に上がらせただけから、仕方がない。

柱に爪とぎされなかっただけ、ましというもの。

けれど、ちょうどいい。

このソファには、何か布をかけて覆ってしまおう。

はつきり言って、ソファの紺色は、この部屋には合わない。

もっと明るい暖色で、かわいい柄がプリントされた布を買ってこよう。

明日にでも、沿線の駅にある大型雑貨店に行かなければ。

ついでに、他にも何か気に入ったものがあつたら、いっぱい買ってきて、この際、部屋の雰囲気を変えてしまおう。
冷蔵庫もからっぽだから、食料品も買い出しに行かなきゃならなし。

真緒は、猫の爪の跡が残った背もたれを撫でた。
きみは、たいした理由がなくてこの部屋に来て、たいした理由もなく料理を作ったのかもしれないけれど。
私にとっては、たいした理由があつたと思うよ。

真緒はそのとき、パソコンのマウスの下に、折りたたんだ紙がはさんであるのを見つけた。

見慣れない紙だった。真緒のものではない。
きちんと折りたたんだ、その紙を開けてみる。
そこには、メールアドレスが書かれていた。

> k i r o k u g a k a r i @ j p <

整った、きれいな文字。

ひとつひとつ、時間をかけて、丁寧に書いたような。

「キロクガカリって……」

真緒は、声を出して、思いきり、笑った。

真緒の声を部屋全体が、あたたかく包んでくれたような気がした。

「実は、結構気に入ってるんだ、あっちの世界と、引き継いだ役割だつて、ケータイのアドレスのアカウント名つて、普通、自分の嫌

いなものにはしないもんね」

それで、彼はさつき、真緒が携帯を持っているということを聞いて、安心したのだろう。携帯を持っていないと、携帯同士でのメール交換は、もちろん出来ないからだ。

これは、切符。

毎日の生活に、>不思議で奇妙な非日常<が入ってくるのが約束されたチケット。

それを選ぶかどうかは、真緒のこれからの判断になる。

真緒は、しばらくメールアドレスを眺めたあと、その紙を大切にたたんだ。

『猫ふんじやった』のオルゴールのメロディーが流れる。

桃華からのメールだ。

画面を見てみると、相変わらず、件名なし、本文一行だけの文章だった。

>メアド、ゲットした？<

なんとというタイミングと内容。

桃華も、案外、遠いご先祖が別の世界からやってきたりしていて、真緒は、くすつと笑う。

あの浪人生が話してくれた別の世界の話は興味深かったけれど、この世界だって、そして自分の未来だって、いろんなことで溢れている。

おもしろくて不思議で未知なことも、もちろんいっぱいありそう
だ。

真緒が日頃見ているようで、実際は見えていないもの、見過ごしているものも、たくさんある。

失恋で落ち込んでいる場合じゃない。

もしかしたら、来年の春を過ぎる頃には、人間じゃない彼氏が出てくるかもしれない。

桃華と一緒に、ゴスロリの格好をして、歩いているかもしれない。でもって、桃華も、あの目つきの悪いビジュアル系の美青年と付き合っていたりして、四人で遊園地でダブルデートしたりしてるかもしれない。その頃には、真緒も、ビジュアル系青年の目つきの悪さに慣れているかもしれない。

そして真緒は、彼が、姫君よりも上司よりもやつかいな存在だと言った、あの女子高生——ほぼ黒猫の飼い主であり、真緒の高校の後輩である彼女の家庭教師をしていて、ほぼ黒猫にも、週に何回かは定期的に会えていたりするかもしれない。

そんな想像をしてみると（そこまで行くと、もうほとんど妄想に近いのだけれど）、未来は、とてもおもしろい。わくわくするくらいに。

やっぱり、来年の三月になったら、あの浪人生にメールを送ってみよう。

合格したよって、返事がくることを期待して。

そしたらきつと、新学年に大学のどこかで顔を合わせるよりももっと早く、確実に彼に会えるだろう。

もしかすると、三月まで待つなんて我慢できなくて、一か月後、いや一週間後、いやたとえばもう明日なんかに、取りあえずメールしてしまっているかもしれない。

メアドありがとう、受験がんばってねって。また春に会おうねって。

真緒は、桃華のメールに返事を送った。

>ゲットした♪<

>ダーク七都外伝・クッキングギャット 完<

補足

最後の>ゲットした♪<の♪の部分には、本来は携帯の絵文字（上昇矢印二個と太陽マーク）が入ります。

おまけ

— ほぼ黒猫（ナチグロロビン）が作った料理のレシピ —

卵とハムの焼きうどん・キムチ味噌汁

【材料】 材料は、すべて一人分です。

卵（１個）、ロースハム（１パック）、うどん（１玉）、青のり、ウスターソース、キムチ（適量）、味噌、だし、しょうゆ

１・フライパンに油を熱し、溶き卵、うどんを入れ、うどんに卵をからませるように炒める。

２・２センチ角に切ったハムを入れ、卵とハムに軽く焦げ目がつくまでさらに炒める。（途中、隠し味に、しょうゆをちょこっと入れる）

３・器に盛り、青のりをふり、ウスターソースをかける。

４・味噌汁を作り、キムチを入れてひと煮立ちする。

* キムチの辛さが苦手な方は、水洗いしてから入れるといいですよ。

* 青のりの代わりに黒のり、青のりと一緒に鰹節をかけてもおいしいです。

おにぎり2種とキャベツの味噌汁・ウサギりんごのデザート

【材料】

ご飯（茶碗1杯）、ゆでた冷凍枝豆（適量）、青のり、塩、卵（1個）、キャベツ（1〜2枚）、ピーマン（1個）、味噌、だし、りんご（2切れ）、ヨーグルト

- 1 ラップを広げ、塩を均等に、ぱぱつとふる。
- 2 半分のご飯をラップに乗せて包み、上から握って、形を整える。
- 3 ラップから出して、青のりをふる。

- 4 残りの半分のご飯に塩をふり、枝豆を散らす。

- 5 ラップに包んで握り、形を整え、3と一緒に、お皿に盛る。

- 6 鍋にだしを熱し、千切りにしたキャベツと輪切りにしたピーマンを入れる。

- 7 卵を器に割り、電子レンジで20秒、チンする。（鍋にくっつかないようにするため。くっつくと、洗うのがたいへん）

- 8 7を6の鍋の中に落とす。しばらく煮る。

- 9 卵が半熟になったら味噌を溶き、火を止め、椀に盛る。

- 10 りんご1切れでウサギりんごを作り、残りの1切れは細かく

切る。両方とも塩水につけておく。（変色を防ぐため）

11. 器にヨーグルトを入れ、細かく切ったりんごを混ぜる。上からウサギリんごを乗せる。

邪道カレー

【材料】

レトルトカレー（1袋）、ナス（1本）、ピーマン（1個）、冷凍枝豆（適量）、りんご（1切れ）、ヨーグルト（大さじ1）、チヨコレート（1かけ）、ワイン（大さじ1）、ガラムマサラ（適量・カレーパウダーでもOK）

1. ナス・ピーマンは、食べやすい大きさに切る。りんごは、すりおろす。

2. レトルトカレーを鍋に入れ、残りの材料も全部入れる。

3. 野菜がやわらかくなり、カレーになじむまで、煮る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3358m/>

クッキングキャット <ダーク七都外伝>

2011年10月7日14時05分発行